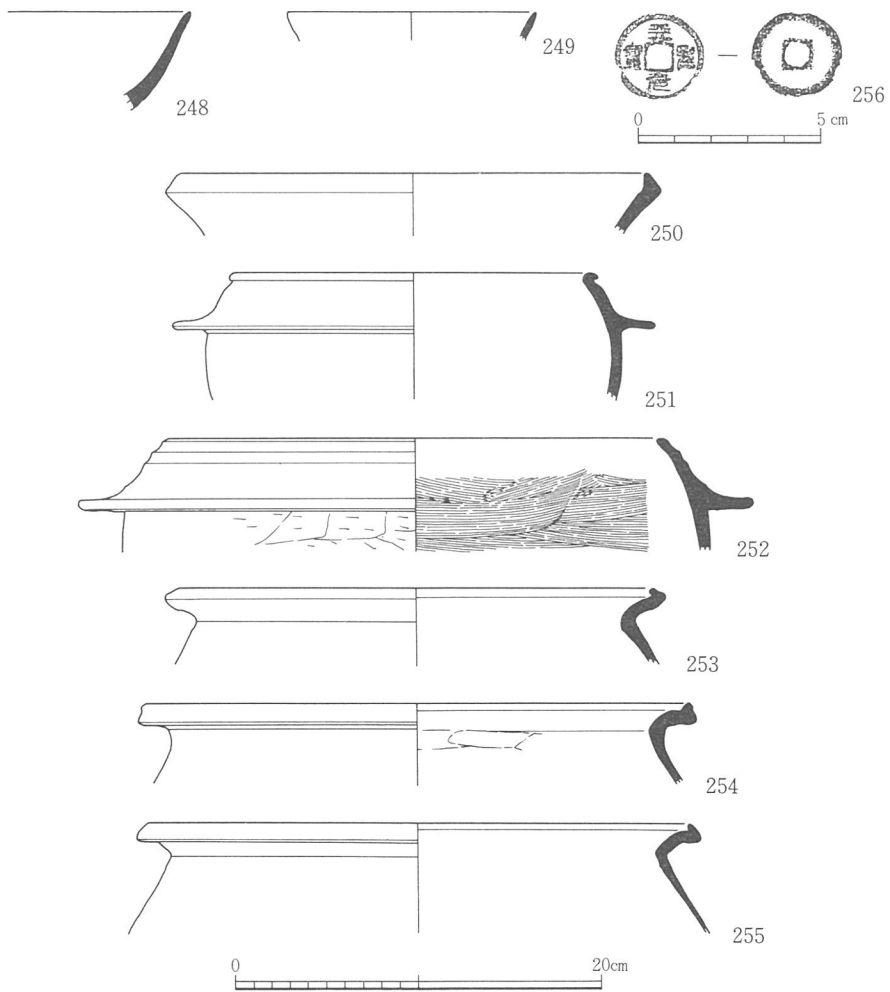


36-O Z 出土遺物 第51図 図版43

本報告の分類に従えば、土師質羽釜(251)はC類、瓦質羽釜(252)はE類、須恵質鉢(250)はC類に分類される。土師質甕(253~255)は口縁部が「く」の字状に外反し、口縁端部を上方もしくは内上方に摘まみ上げるもので、いずれも胎土中に結晶片岩の細片を含んでおり、形態・胎土の状況から紀伊型(産)のものと判断される。この他、青磁碗(248・249)や初鑄1023年の天聖元寶が出土している。これらのうち土器資料はいずれも、14世紀後半~15世紀前半までの遺物と考えられ、本遺構の年代もそれ以降のものと判断される。



第51図 36-O Z 出土遺物

37-OZ 第45図 図版10

36-OZの南側に検出された「L」字状の掘り込みで、深さ約5cmをはかる。遺存状況が悪く、瓦器の小破片を少数検出しただけで不明な点が多いが、36-OZとの方向性・位置関係から36-OZと同時期・一連の遺構と判断される。また、36-OZとの間は幅約60cmの掘り残し部分となっており、この部分は畦畔に相当すると思われる。

40-OZ 第45図 図版10

深さ約25cmの第4層の段として検出され、N-16°-W方向に直線的に延び、長さ約28m以上をはかる。第3c層が埋土に相当し、その年代は15世紀以前と判断される。

その他の遺構

以上の他、本調査区では土壇状・ピット状の遺構が相当数検出されているが、ピット状の遺構にはその規模から杭跡と判断されるものが多く、建物などを構成するようなものはない。また、総じて出土遺物も乏しく、図化できるような遺物は39-OPから瓦器椀が出土しただけである(第49図)。土壇状の遺構についても、不明瞭なものも多く、顕著な遺物の出土もない。ただ、34-OOから焼土壁片が少数出土していることは特筆されよう。

4. L地区 第52~97図 図版11~26 (断面ポイントは第53図)

和泉丘陵の裾に位置するL地区は、比高差を有する数面の耕作面からなり、特に地区東端部では、1.5m・2mと著しい。おそらく、丘陵端部を耕作地開発のため削平した結果であろう。地区内では、東端部の特に比高差の著しい所で約0.9mの2b層が数枚に分れて堆積しているが、その下はすぐ第4層である。そこで調査は、2b上・中・下層に分けて遺物の取り上げを行い、遺構は2b下層・4層上面で検出した。その他の部分では、他地区同様、数面の耕作面の縁辺部を中心に3c・3d層が堆積し、遺物も大量に含まれていた。第4層上面での標高は、約67.0~73.0mである。

さてL地区は、山直中遺跡で最も遺構の集中した地区である。調査の結果、掘立柱建物跡4棟・柵1列・井戸1基・溝・土壇・ピットなどを検出した。これらの遺構は、12世紀後半代のと15世紀代の大きく二つの時期に分かれるが、前者は第4層上面で後者は第3c層上面でそれぞれ確認した。

A. 15世紀代の遺構と遺物

15世紀代の遺構はおもに調査区東側に集中するが、溝、土塼、水田跡を検出したにすぎず、建物跡は確認できなかった。遺構埋土は、灰褐色系の砂質土である。

溝状遺構 第54図 図版14

溝は、調査区東端部で集中的に検出した。主軸方向をN-25°-Wにとるものと、N-30°-Eにとるものにわかれる。

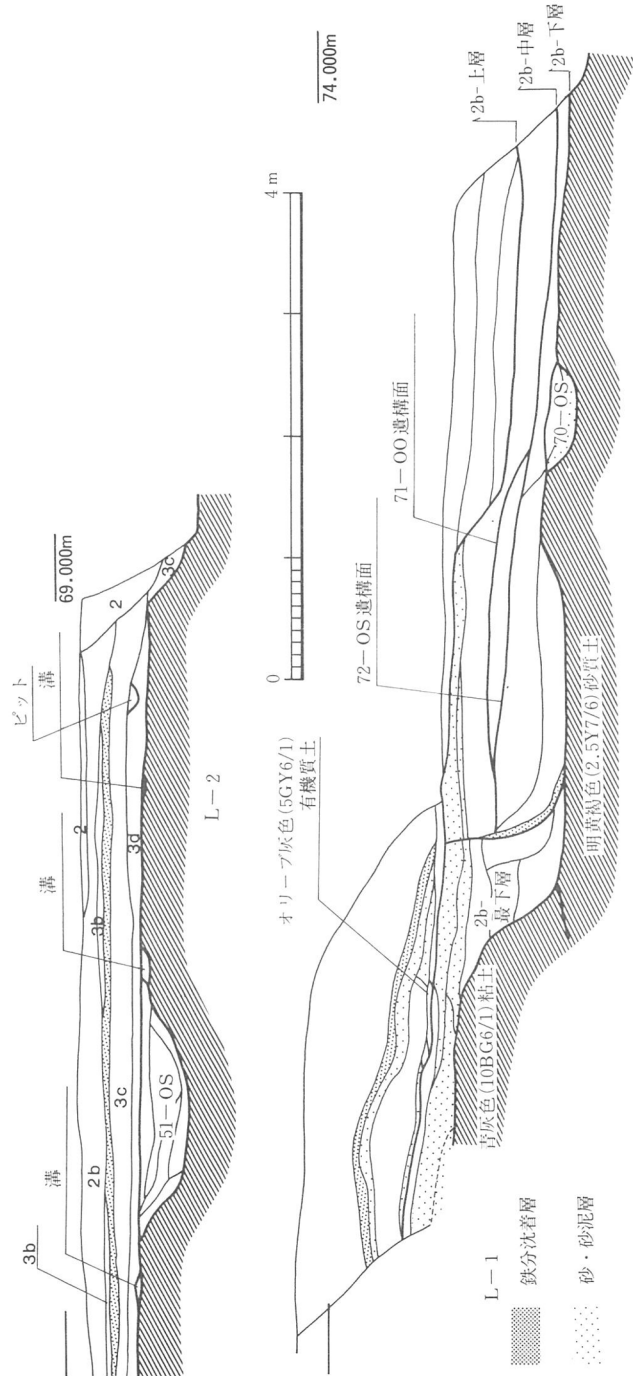
70-O S 第53図

調査区東端で検出した溝で、北端では69-O Sを切っている。また南端では71-O O及び73-O Sに切られる。検出した全長は18m・幅0.7~2.3m・深さ0.3mである。

70-O S 出土遺物 第55図 図版44

出土遺物は、瓦器碗・瓦質羽釜・甕である。瓦器碗(264)は、復元口径に比べ器高は非常に低い。おそらく

高台の付加しない瓦器碗であろう。

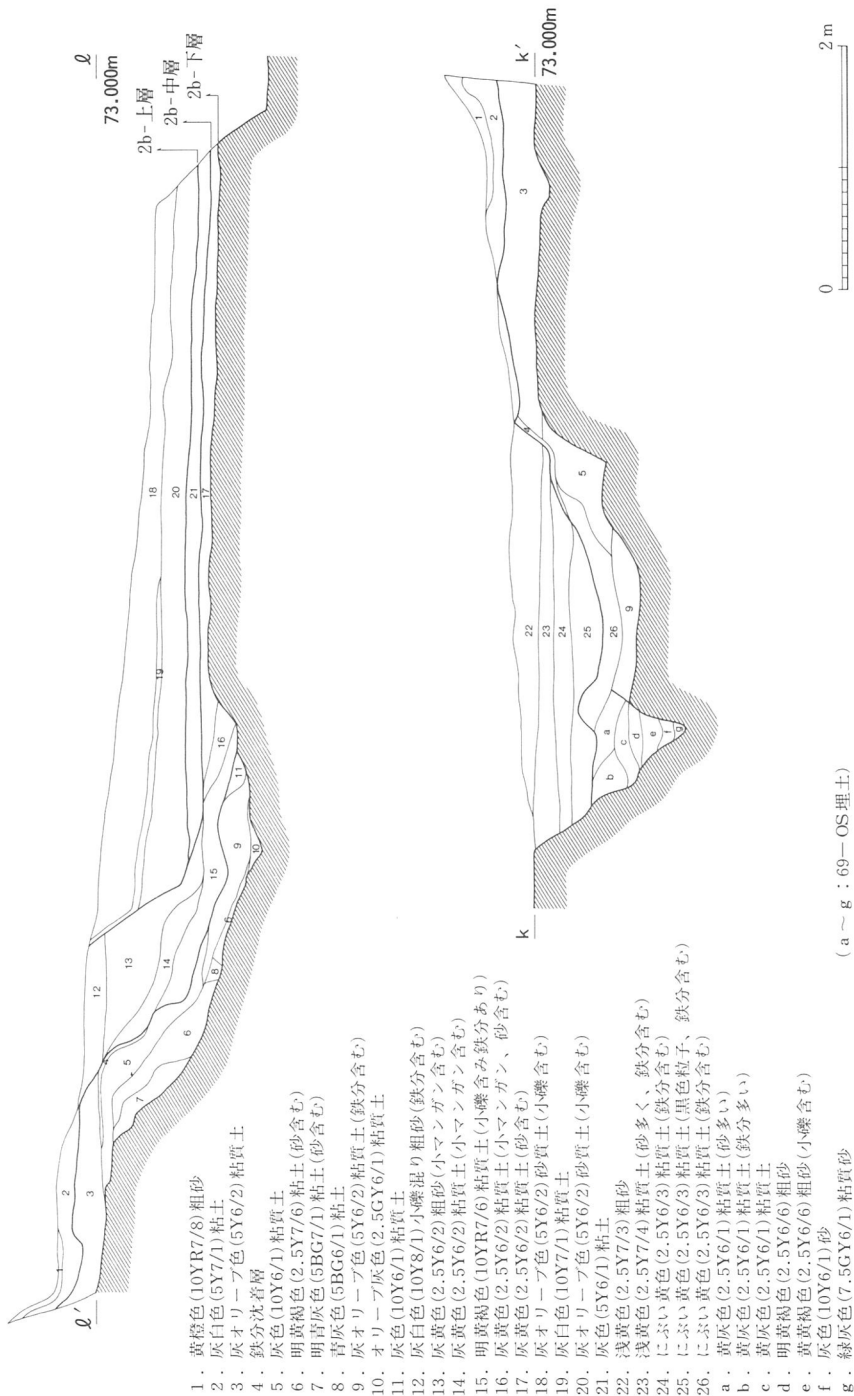


第52図 L-1~2土層断面図

瓦質羽釜は計10片出土しているが、E類(266・267)・E類(265・268)に分類できるも

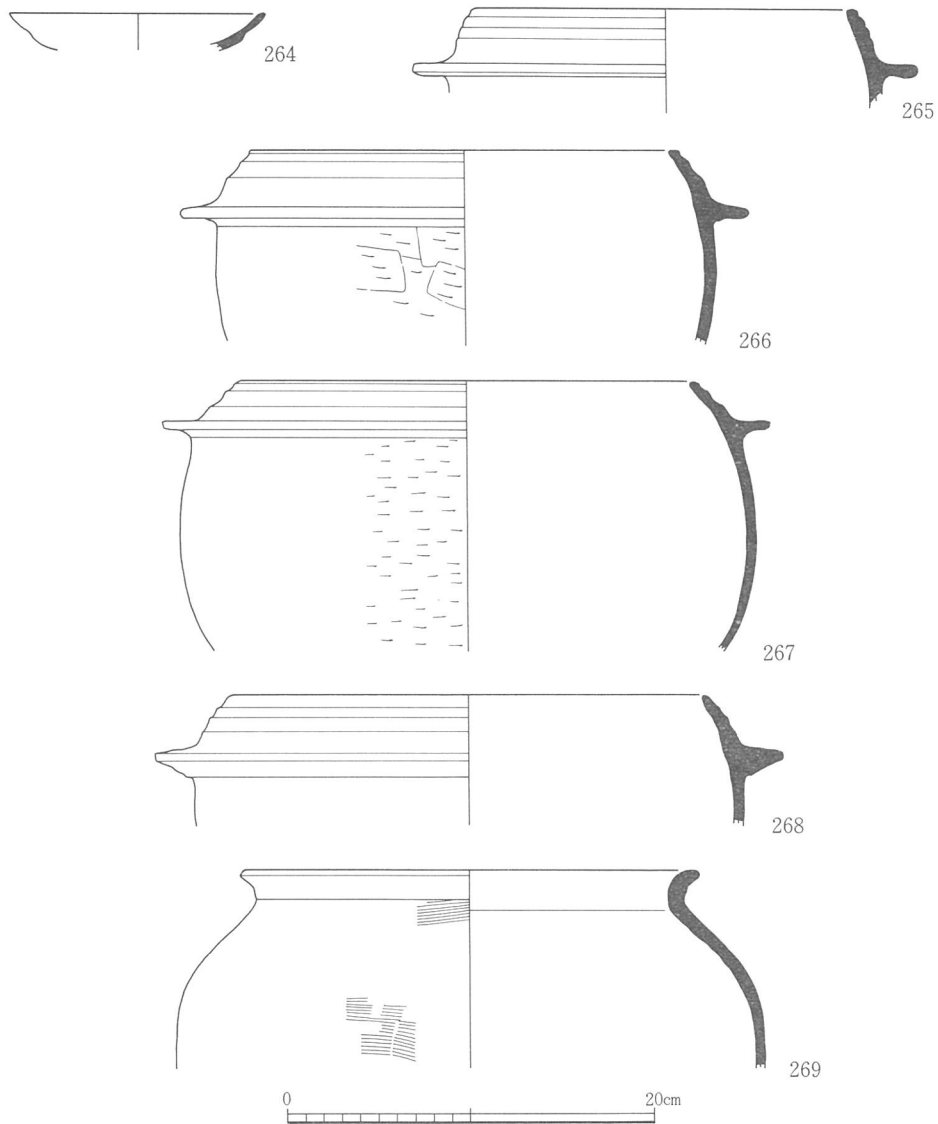


第53図 L地区検出遺構



第54図 L地区東端部土層断面図

のだけである。瓦質甕は計7片出土しているが、(269)に見る如く口縁部が逆「コ」字状に外反し、口縁端部が丸くおさまるタイプがあるだけである。このタイプの瓦質甕は大園分類ではB型式に相当する。



第55図 70-O S 出土遺物

72-O S 第53図

72-O Sは調査区東端、71-O Oに先行する溝である。全長3.7m・幅0.3~0.4m・深

さ0.06mで、非常に細長く浅い溝である。70-O Sとの先後関係は不明である。

72-O S 出土遺物 第97図

出土した遺物は土師質皿5片である。(413)はB類に属する。

65-O S 第53・54図 図版14

調査区東端、和泉丘陵との傾斜変換点に位置し、丘陵端部にそって掘削された溝である。溝西側は本来緩斜面であったと考えられるが、削平のため現状では西側の溝の方が浅くなっている。この溝は数回の掘り返しが行われ、次に述べる64-O Sは65-O S埋没後に掘削された溝である。全長22m・幅2m・深さ0.6mで、断面形「U」字形を呈する深い溝である。埋土の状況からみて一度に埋没したのではなく、徐々に埋没し機能しなくなったものと考えられる。埋土中から瓦質羽釜が出土した。

65-O S 出土遺物 第57図 図版44

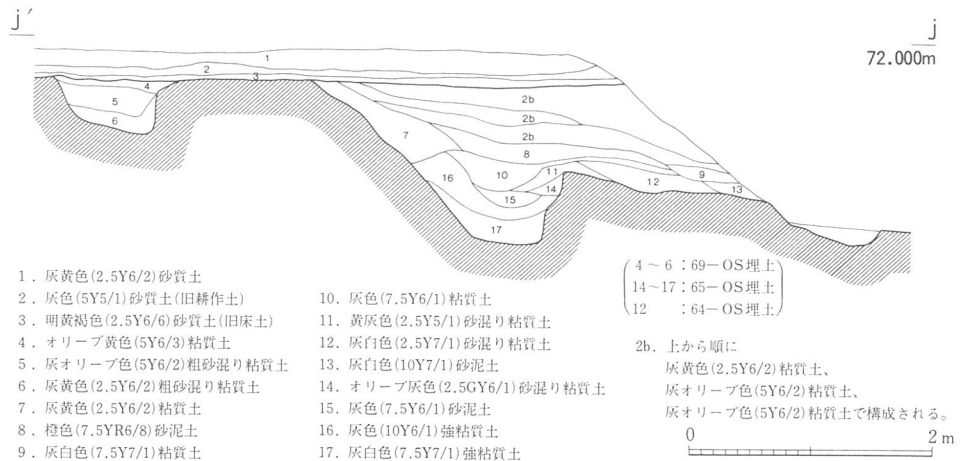
瓦質羽釜は計6片出土しているが、E₁類(270・271・273)・E₂類(272・274)に分類できるものだけである。

64-O S 第53・56図

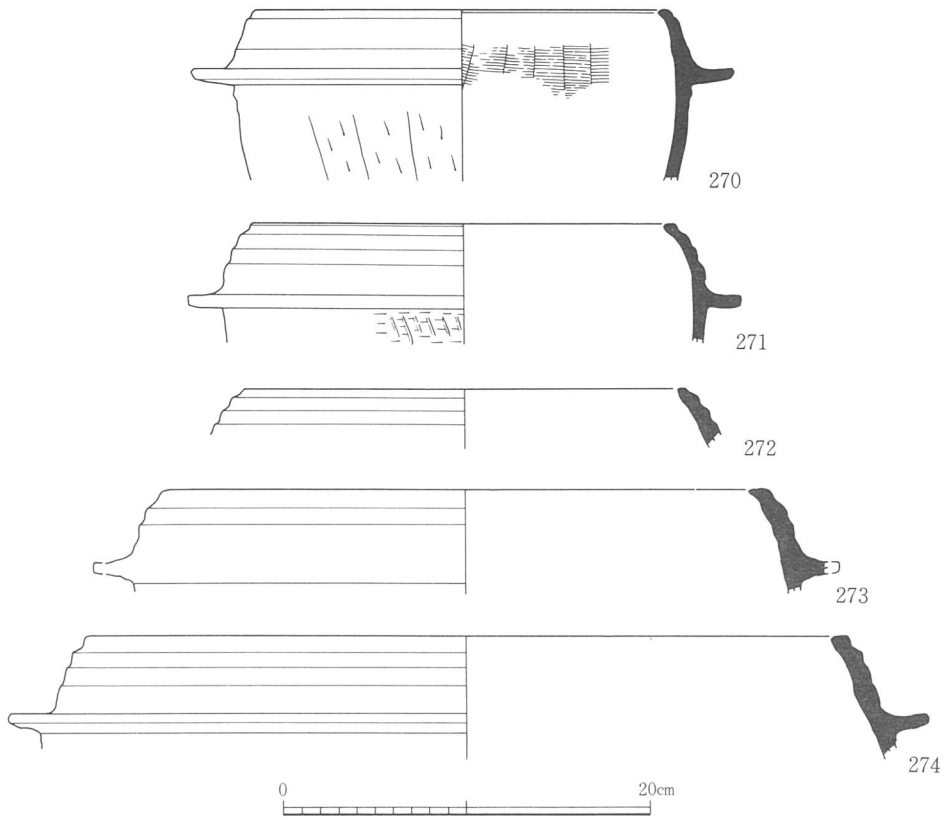
65-O S 廃絶後に掘られた64-O Sは溝東側の肩は残存するが、西側は、この溝を切る新たな溝の掘削もしくは後世の削平のため消滅している。

64-O S 出土遺物 第97図

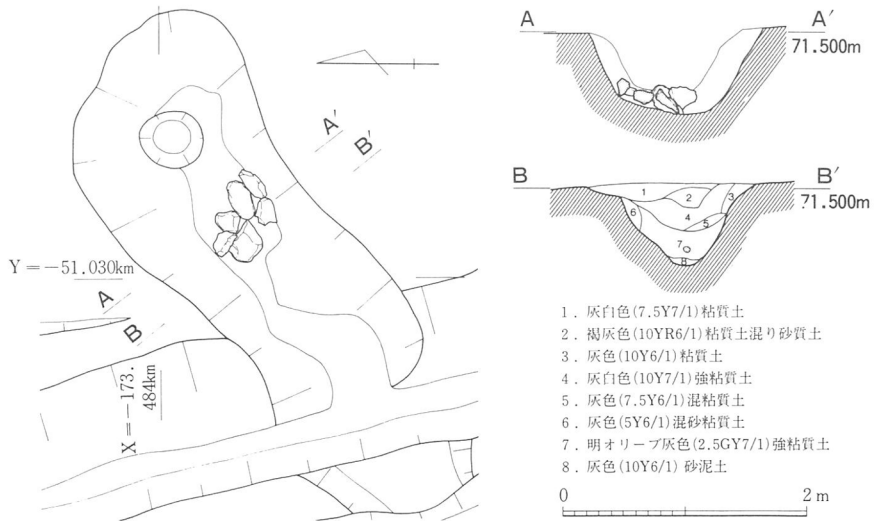
(417)はE₂類に分類される。



第56図 65・64-O S断面図



第57図 65-O S 出土遺物



第58図 67-O S

67-O S 第53・58図 図版15

67-O Sは、64-O S・65-O Sにはぼ直交し、両溝廃絶後に掘削された溝である。残存する溝の全長4.5m・最大幅1.6m・深さ0.7mをはかる。溝内には第58図で示したように溝底部直上で30cm前後の円礫を数個検出した。性格・用途については不明である。

67-O S 出土遺物 第97図

(416)はE₁類に分類される。

68-O S 第53・59図

67-O Sと同様、65-O Sを切り込む68-O Sは、全長9m・最大幅3m・深さ0.8mの規模を持ち、「S」字状に蛇行する。溝内からの出土遺物は少量で、図示できたものは瓦質羽釜、須恵質こね鉢のみである。

68-O S 出土遺物 第65図

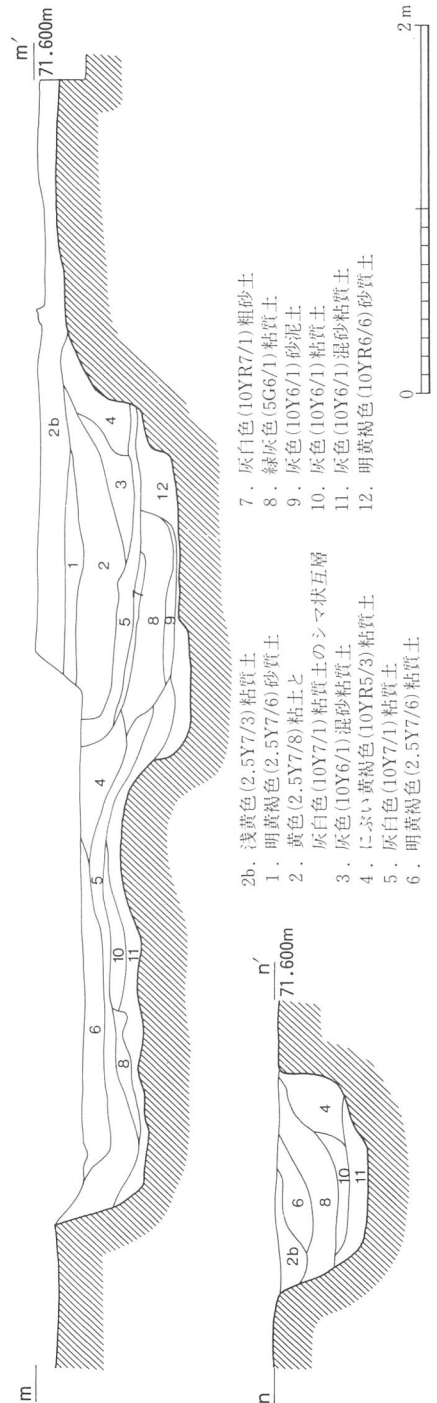
瓦質羽釜が6片、須恵器鉢が1片出土しているが、瓦質羽釜はE₁類(275)、図鉢はD類(276)に分類できるものだけである。

57-O S 第53図

57-O Sは、調査区北東の大幅な削平を受けたと考えられる丘陵裾に位置する「S」字形の溝である。規模は、全長7.2m・最大幅1.2mであるが、深さは0.05mと非常に浅い。溝埋土から須恵質鉢が出土している。

57-O S 出土遺物 第97図

須恵質鉢(420)は、D₁類に分類される。



第59図 68-O S断面図

52-O Sは、調査区中央の北半で検出した溝で、検出時には後世の削平のため78-O Sなど三ヶ所に分断していた。しかし、各溝から出土した遺物や埋土の状況、溝の方向性などから判断すると、これらの溝は本来一連のものであったと考えられる。検出した全長は16.1m・幅0.5~1.4m・深さ0.3mである。分断された3本の溝のうち、52-O Sから30cm前後の礫が数個、瓦片・土師質土器・須恵質鉢・銅銭とともに出土した。

52-O S 出土遺物 第65図 図版51

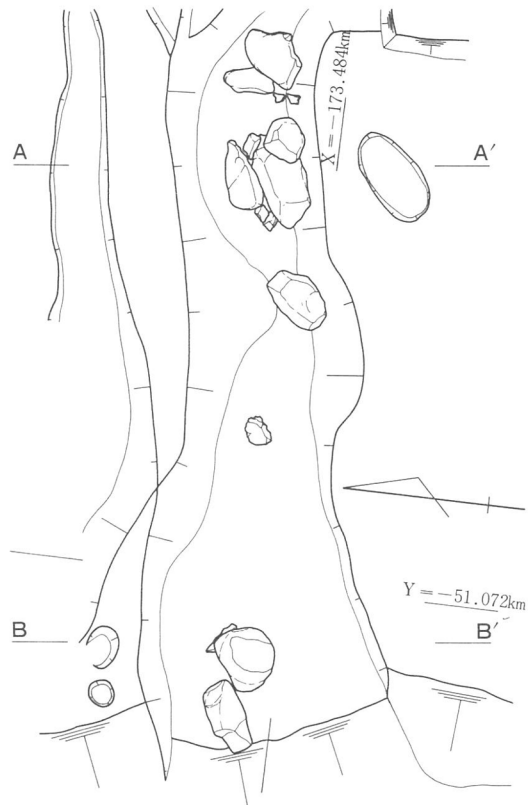
須恵器鉢が計3片出土したが、C₂類(278)・C₃類(277)に分類できるものだけである。その他、初銭鋳621年の開元通宝(279)が1点出土している。

瓦片は、いずれも平瓦の小破片(破片数6片)で、図示できるものはない。軟質の平瓦(5片)は凸面に離れ砂が付着するのに対し、硬質のものは凹面に付着する。タタキ目はともに観察できない。

土壌

73-O O 第53・61図 図版15

70-O Sにつくられた73-O Oは、直径2m・深さ0.4mの土壌で、お



第60図 52-O S

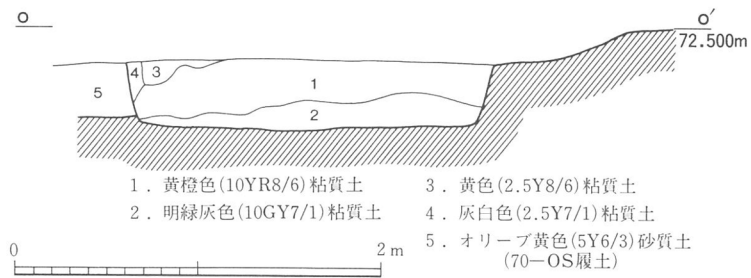
そらく埋樋と考えられる。埋土中から瓦質羽釜口縁部の破片が出土した。

73-00出土遺物 第97図

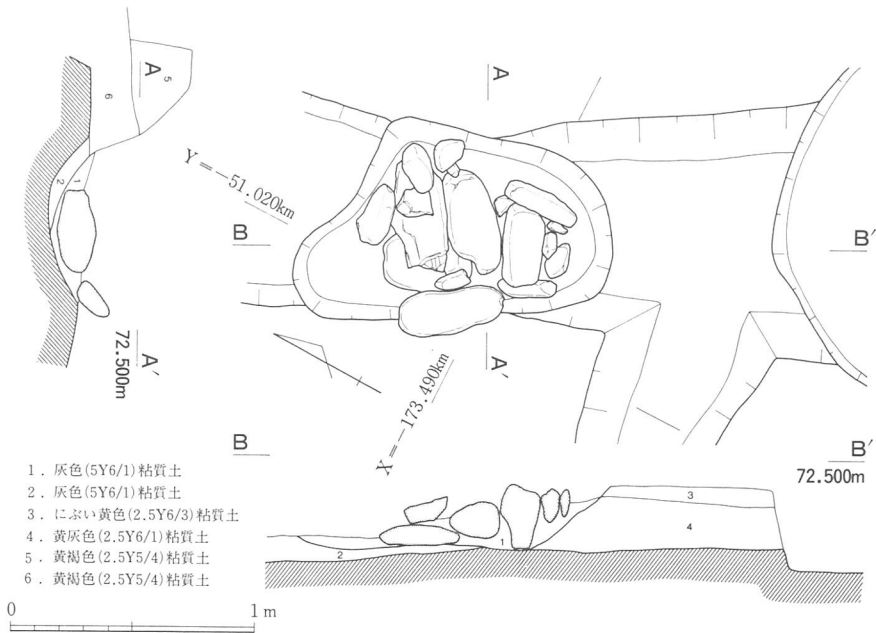
763-00出土の瓦質羽釜(418)はE₁類に分類される。

71-00 第53・62図 図版15

調査区東端を南北る流れる70-OSを切ってつくられた土壌である。規模は長辺1.2m・短辺0.7m・深さ0.3mをはかり、楕円形を呈する。土壌内では、長さ70cm程度の長方形の礫数個を検出したが、性格については不明である。



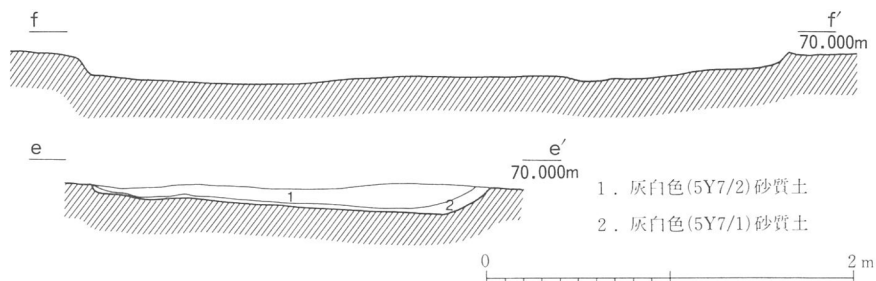
第61図 73-00



第62図 71-00

58-00 第53図 図版19

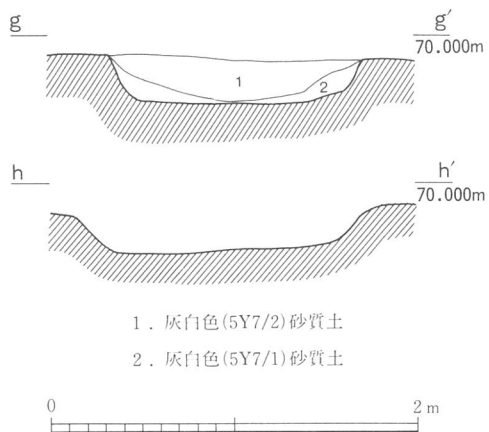
58-00は、長辺4m・短辺2.2mの隅丸方形を呈する土壇で、深さ0.2mをはかる。瓦器類5片、土師質甕1片が出土したが、図示できるものはなかった。



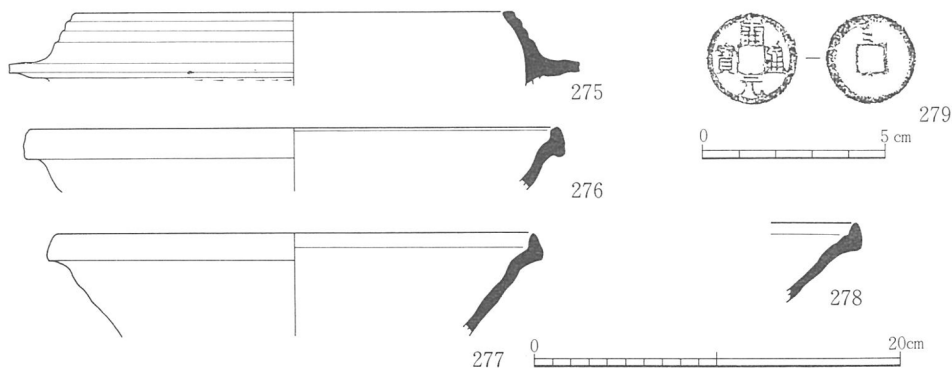
第63図 58-00

59-00 第53・64図 図版19

59-00は、長辺1.7m・短辺1.5mの楕円形を呈し、深さ0.3mをはかる。瓦器類14片、土師質皿9片、土師質甕33片、土師質羽釜1片、須恵質鉢2片が出土したが、図示できるものはない。



第64図 59-00



第65図 68・52-OS 出土遺物

水田跡

66-OZ 第53図

66-OZは、65-O Sなどの溝がある段状に位置し、東西3.6m・南北3.8mの小規模畦畔を伴う。埋土は黄褐色を呈する。須恵質鉢が出土している。

66-OZ出土遺物 第97図

須恵質鉢(419)は、D₁類に分類される。

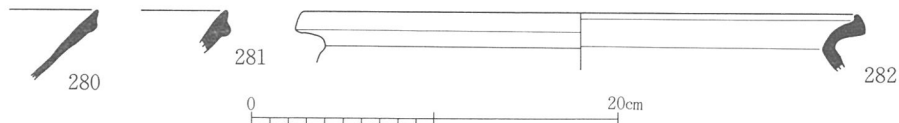
60-OZ 第53図 図版19

60-OZは東西18m・南北25.3mにわたり畦畔を伴う。この水田跡の西側部分は、第3d層をベースとして形成され、全体にわたり灰色砂質土を埋土に持つ。この埋土中から瓦器碗・皿や須恵質鉢、土師質甕が出土した。

60-OZ出土遺物 第66図

瓦器類は395片、また土師質皿は124片出土したが、図示できるものはなかった。

須恵質鉢は計5片出土しており、図示した(280・281)はB₁類に分類できる。土師質甕(282)は器形及び胎土の状況から紀伊型(産)甕と判断される。



第66図 60-OZ出土遺物

B. 12世紀後半代の遺構と遺物

12世紀後半代の遺構は、調査区西側に集中する。掘立柱建物跡、柵、井戸、溝、土壇などの遺構が確認され、溝から土器の一括資料も出土している。しかし、43-O B、44-O Bなどの建物跡周辺は、後世の耕地化によって大きく削られている。埋土は、黄褐色系の粘質土である。

溝状遺構

61-O S・62-O S・63-O Sはいずれも調査区南東部で検出した溝である。これらの溝はともに平行して存在し、その方向はN-15°-Wである。

69-O S 第53・67図 図版16

調査区東北隅で検出した溝で、「L」字形に屈折し、端部は65-O Sに切られる。検出した溝の全長は、25m・幅0.3~1.5m・深さ0.4mである。瓦器碗や土師質羽釜が出土した。



1. オリーブ黄色(5Y6/3)粘質土
2. 灰白色(7.5Y7/1)粘質土
3. 灰オリーブ色(5Y6/2)粗砂混粘質土
4. 灰黄色(2.5Y6/2)粗砂混粘質土

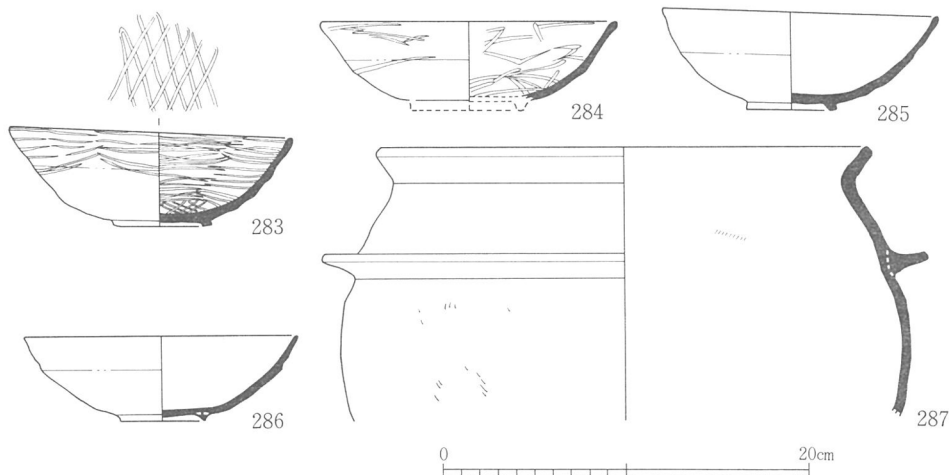
第67図 69-O S断面図

69-O S 出土遺物 第68図 図版45

瓦器碗(283~286)は、総破片数14片である。

いずれも器壁のいたみが著しいが、A類に属するもの(283)、C類に属するもの(284)、D類に属するもの(286)がある。

土師質羽釜(287)は1個体(破片数で10片)出土しただけである。B類に分類でき、体部外面はヘラケズリ調整、体部内面にはナデ調整を加えているが、一次調整のハケ目が認められる。



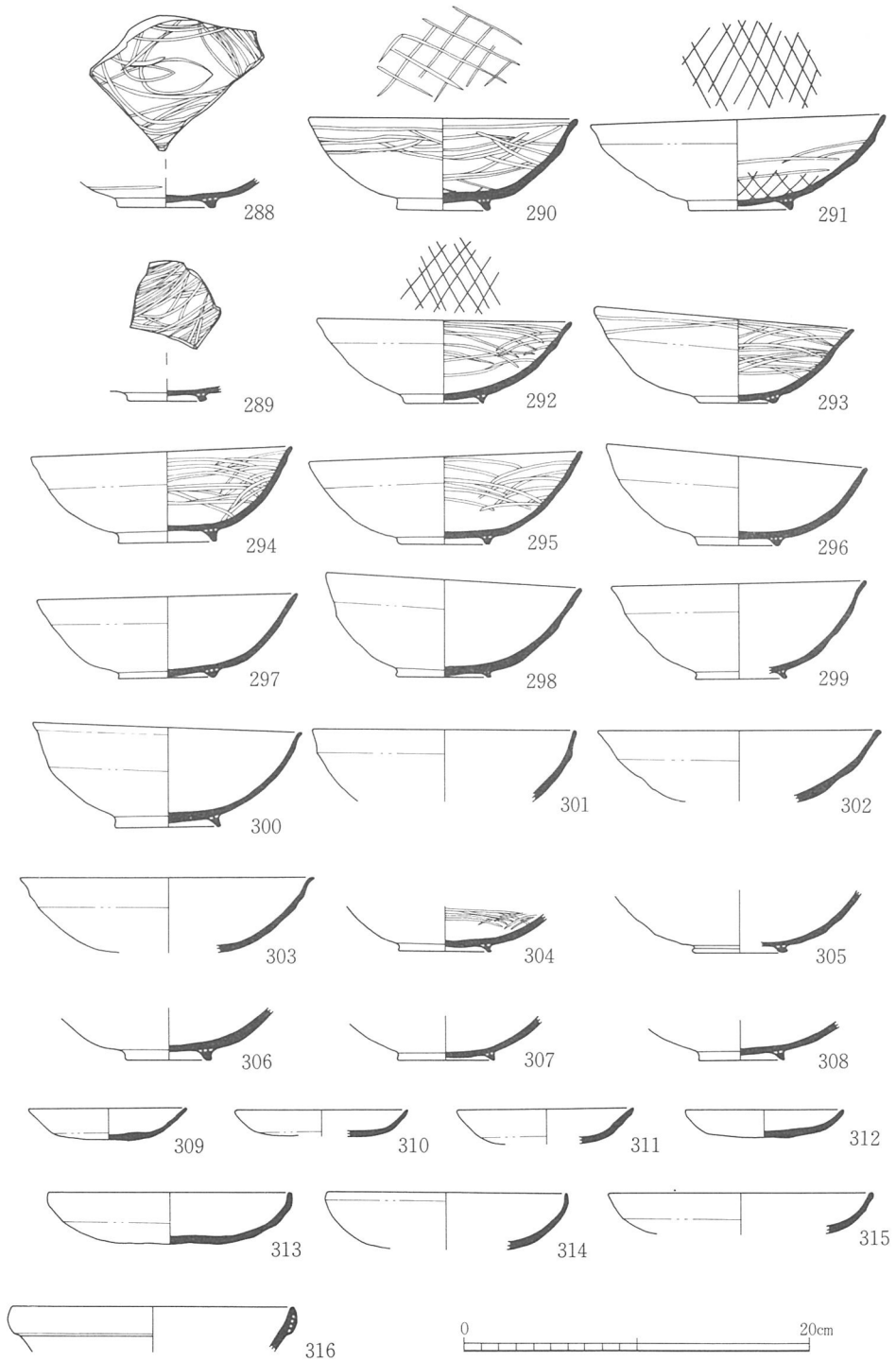
第68図 69-O S 出土遺物

63-O S 第53・69図 図版18

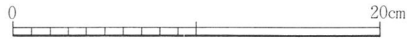
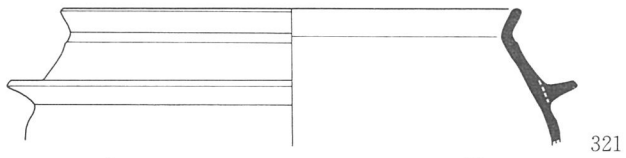
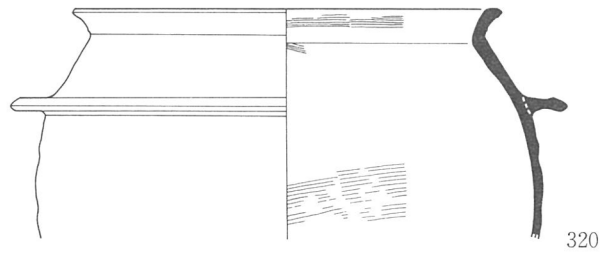
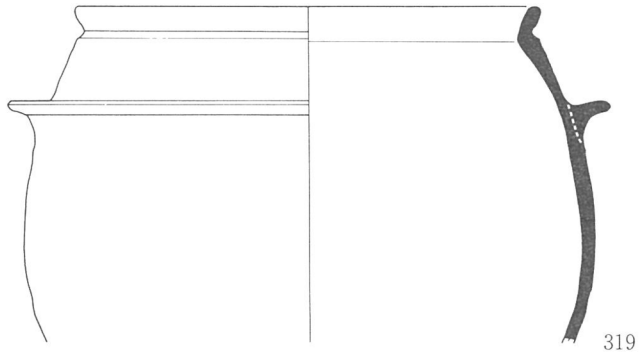
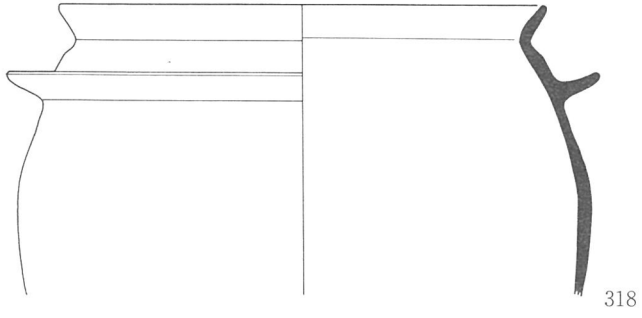
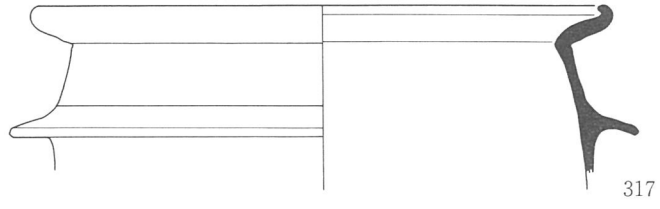
検出全長23m・幅0.4~1.2m・深さ0.2mの溝で、埋土は上層・下層に二分される。北半分で土器類が集中的に出土した。これらの出土状況は、①遺構内の特定範囲に集中していること。②同一個体片がまとまって散布していること。③溝底面に密着するものは少数で、大多数は埋土下層中で検出される。遺物によっては直立状態で下層から上層にまたがって検出されたものも少なくない。④埋土上層で多くの遺物が検出される場合もあるが、その場合も同一個体片が埋土下層や床面に密着するような状況で検出されている。以上のよ



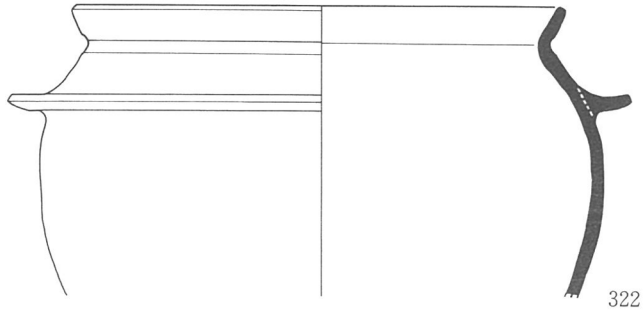
第69図 63-O S



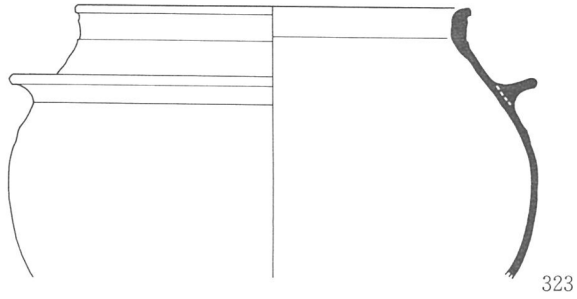
第70図 63-O S出土遺物(1)



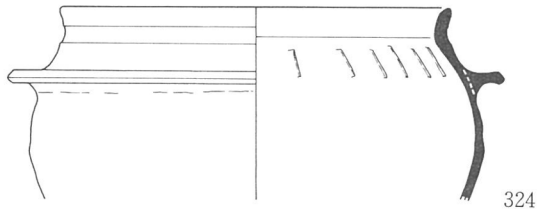
第71図 63-O S 出土遺物 (2)



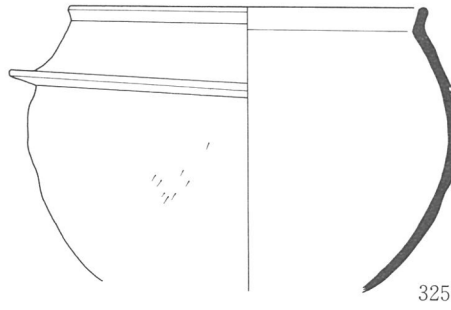
322



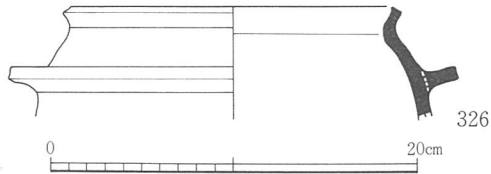
323



324



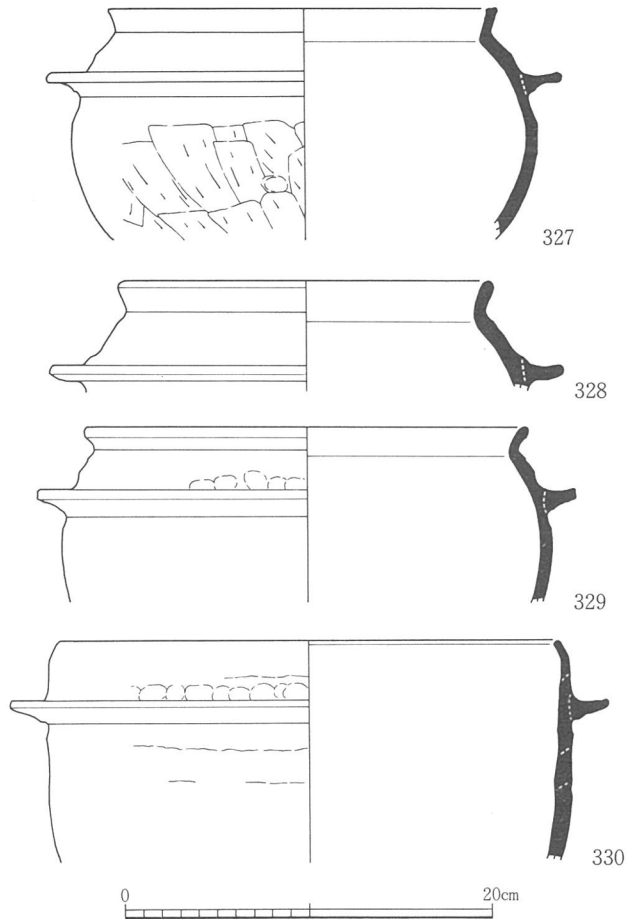
325



326

0 20cm

第72図 63-O S 出土遺物 (3)



第73図 63-O S 出土遺物 (4)

うな点から、これらは溝がある程度埋まった段階に一括投棄された遺物で、上層に集中する遺物は、投棄後まもなくして流れた程度のもと思われる。出土遺物は、瓦器碗・皿、瓦質羽釜、土師質皿・羽釜、白磁碗がある。

63-O S 出土遺物 第70～73図 図版46・48

瓦器碗・皿(288～311)類は、729片出土した。瓦器碗は24個体以上出土し、他の器種に比べ点数も最も多いが、焼成・還元状況は悪く、調整手法の観察できるものは意外と少ない。(290～295)はいずれもC類に属するが、さらに体部外面上半にヘラミガキが見られるもの(290・293)とそうでないものにとに細分できる。高台形態は、断面方形もしくは三角形を呈する。瓦器皿(309～311)は、外傾度が著しいものばかりでC類に属する。いずれも遺

存度が悪い場合、ヘラミガキの有無は不明である。

土師質皿類116片出土した。土師質皿(312)はA類に属する。土師質大皿(313～315)は、内面底部から外面体部中位までナデ調整を行い、以下外面底部までは未調整である。外面の調整・未調整部分との境には段は形成されない。

白磁碗は森田分類で碗Ⅳ類に相当する(316)が1片出土している。

土師質羽釜は計118片出土しているが、口縁部の形態からはB類に分類されるものがほとんどでA類(317)は1個体確認されたにすぎない。B類に分類されるもの(318～326)は口縁部の外反の度合いや口縁部の形態は変化に富んでおり、口縁部が逆「コ」字状を呈する(323)や口縁部が平坦面をなす(326)などがある。

土師質羽釜の大きさについてみれば、体部最大径が30cmを越えるような大型のもの(317～319・322)と、25～30cm未満の中型のもの(320～323)および25cm以下の小型のもの(324～326)があるが、小型のものは少数である。調整手法についてみれば、体部外面はナデ調整だけのものが多く、ヘラケズリが確認できる例(325)は少数である。外面の調整は総じて丁重さを欠いており、器面に凸凹を多く残す。一方、体部内面は比較的丁重なナデ調整が加えられており平滑に仕上げられている。また、体部内面には一次調整としてハケ目調整を施したことが確認できる例(320・324)が間々みられる。これらの土師質羽釜には体部外面のススや内面の有機物の付着など使用痕跡をとどめるものが多い。

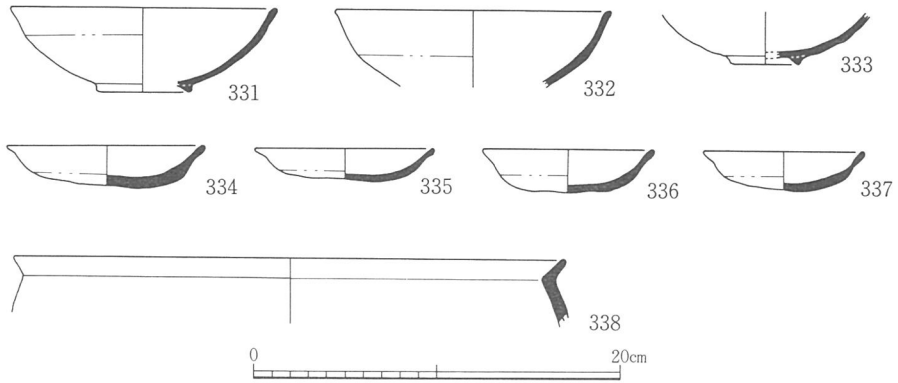
瓦質羽釜(327～330)は計57片出土しているが、B類がほとんどでD₁類(330)は1個体あるにすぎない。瓦質羽釜B類の調整手法は土師質羽釜でみたのと同様で、体部外面にヘラケズリを施した(327)は少数例である。D₁類(330)の器面調整は非常に雑で、成形時の指頭痕や粘土紐(帯)の接合痕を残している。これらの瓦質羽釜は、本遺跡出土例の中では焼成時における還元状態が比較的良好で、断面が黄灰色を呈するような例は少ない。

62-O S 第53図

集中する3条の溝の中では最も短く小規模である。全長3.8m・幅0.9m・深さ0.2m。出土遺物には、瓦器碗・皿、土師質羽釜がある。

62-O S 出土遺物 第74図

瓦器碗・皿は、7個体以上(破片数で882片)出土した。瓦器碗(331～333)は、すべて焼成・還元状態が悪く、調整は不明であるため分類できない。また黒色化したものはない。高台形態は、断面形台形である。瓦器皿(334～337)は、D類に属する。(336)は焼成・還



第74図 62-O S 出土遺物

元状態とも良好であるが、大半は焼成・還元とも不良で、内外面のヘラミガキ調整は不明瞭である。

土師質羽釜(338)は口径が30cmを越える大型のもので、口縁部の形態からはB類に分類される。

61-O S 第53図

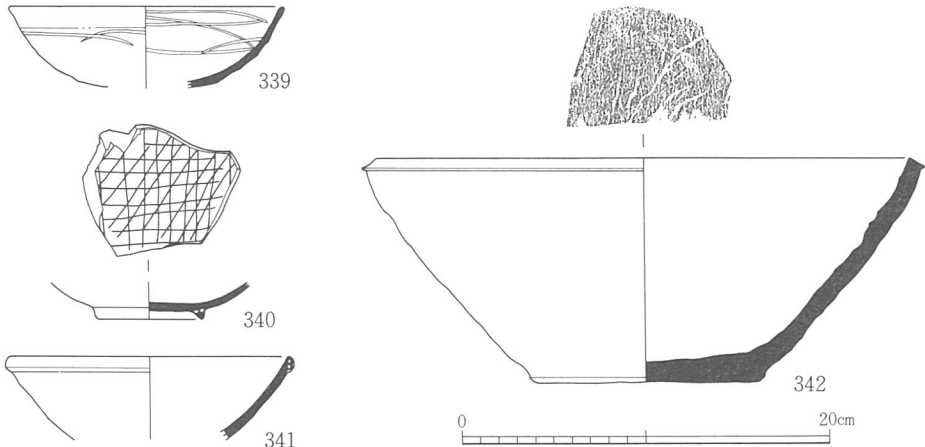
現状では全長10.5m・最大幅1m・深さ0.3mの浅い溝である。埋土中から瓦器碗、白磁碗、須恵質鉢が出土した。

61-O S 出土遺物 第75図

瓦器類は2個体以上(破片数40片)出土しが、図示したのは瓦器碗2点である。(339)は、外面に簡単なヘラミガキが施されていることからC類に分類できる。(340)は、見込み部に細かな斜格子状暗文が施されている。

白磁碗(341)は1個体(1片)出土している。口縁部が小さな玉縁状をなすが全体の器形からは森田分類の白磁碗Ⅳ類に相当すると判断される。

須恵質鉢(342)は周辺の遺構や遺物包含層中から同一個体片が出土しているが、本遺構出土遺物として図示・紹介しておく。(342)は口縁部の形態からはA類に分類される。他類に分類される須恵質鉢に比べると精選された胎土を用いており、体部には成形時の水引き痕を残しているが、口縁部の回転ナデ調整は他類に比すと丁重で、外底面にもナデ調整を加え、他類のように回転系切り痕を残していない。内面は使用のため磨耗が著しいが内底面に同心円状の工具痕が認められる。



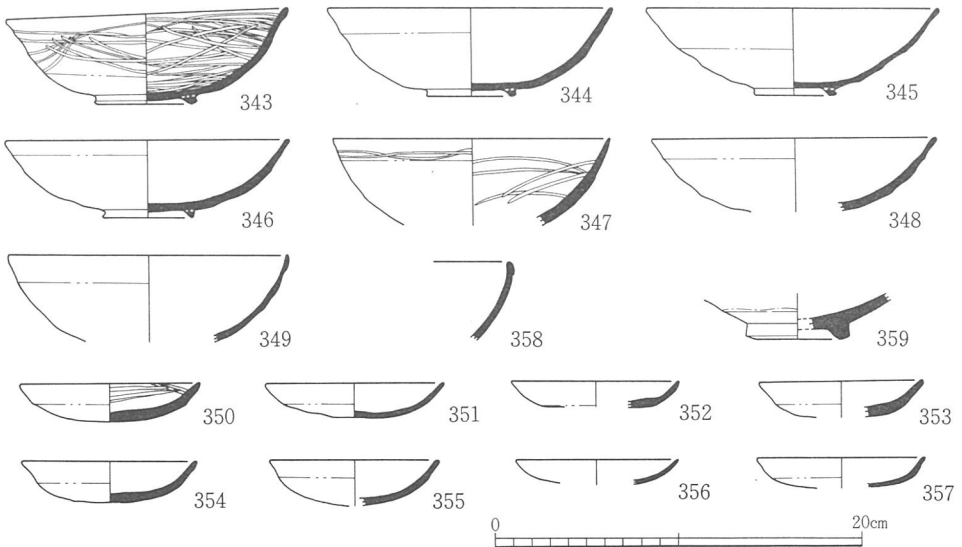
第75図 61-O S 出土遺物

45-O S 第53図 図版21

調査区南側で検出した溝で、「L」字形を呈する。全長7.5m・幅0.5m・深さ0.2mである。特に溝西側で遺物が集中して出土した。

45-O S 出土遺物 第76図 図版50

瓦器類は、13個体以上(破片数で377片)出土した。これらのうち(343)がA類に分類されるが、(347)は、内外面にかろうじてヘラミガキが観察できる程度で分類不能。その他の瓦器碗は、いずれも焼成・還元状態が不良で、内外面の調整はほとんど不明である。瓦器



第76図 45-O S 出土遺物

皿(350・351・353~356)は、(351・356)はB類に属し、残りはD類に分類できる。(350)は内面にヘラミガキが観察できるが、その他は不明である。

土師質皿は81片出土している。(352・357)は、瓦器皿に比べ概して薄手である。(352)はB類に、(357)はC類に分類できる。

白磁が計4片出土しているが、器形のわかるものは、(358)にみられる小さな玉縁状口縁をなすものと、これと同一個体と判断される底部片(359)である。森田分類では白磁碗II類に相当する。

51-O S 第53・77図

43-O B・44-O Bと53-O Bの間にある溝で、北端部は削平のため溝底部のみが痕跡的に残り、二股に分かれる。全長38.3m、最大幅2.1m、深さ0.6mである。溝埋土は大きく上下層に分かれるが、下層は有機物を含む灰色粘質土である。出土遺物には、瓦器碗皿、土師質羽釜・皿、白磁碗などがある。

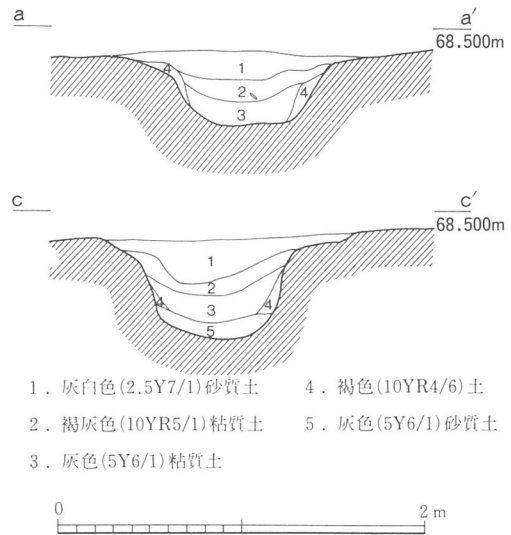
51-O S 出土遺物 第78図 図版50

瓦器碗・皿類は破片数で377出土したが、図示したのは、瓦器碗7点・瓦器皿1点である。瓦器碗(360~366)は、分割性は認められないものの、内外面ともヘラミガキ調整のある(360・361)がA類と考えられる。また高台形態はいずれも断面台形を呈する。(360~363・366)が下層出土、それ以外は上層出土。瓦器皿(368)は、D類に分類できる。

土師質皿は、53片出土した。(367・369)は、ともにB類に属する。

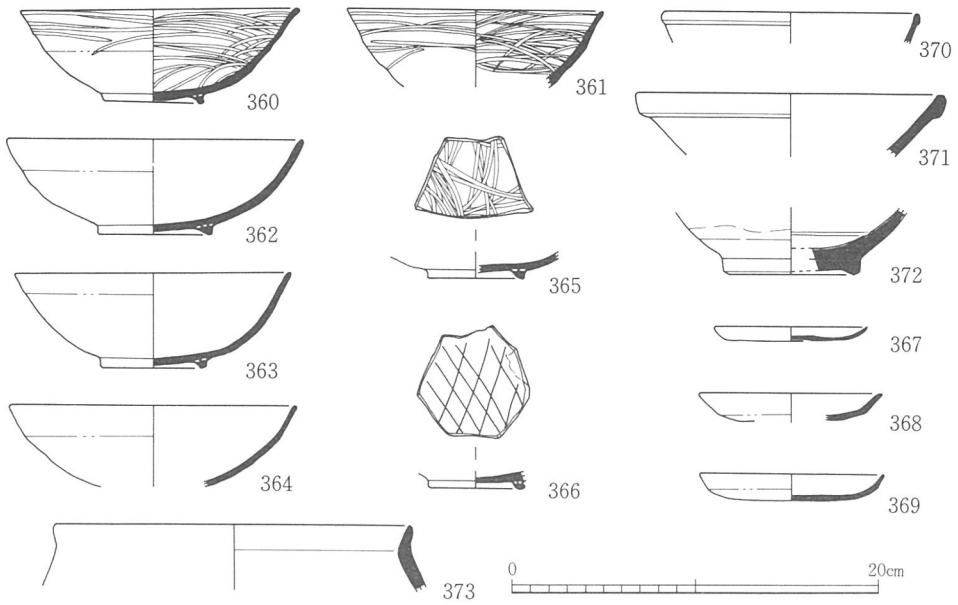
白磁は7片出土している。口縁部片は森田分類白磁碗II類の(370)と白磁碗IV類(371)に分類される。(372)は内底面に沈線を巡らせており、高台の形態や口縁部に立ち上がりの状況から白磁碗IV-1a類と判断される。

土師質羽釜は1片出土したにすぎず、口縁部の形態のわかるものは(373)だけでB類に分類される。



- 1. 灰白色(2.5Y7/1)砂質土
- 2. 褐灰色(10YR5/1)粘質土
- 3. 灰色(5Y6/1)粘質土
- 4. 褐色(10YR4/6)土
- 5. 灰色(5Y6/1)砂質土

第77図 51-O S 断面図



第78図 51-O S 出土遺物

40-O S 第53図

40-O S は、調査区西端付近で検出した溝で、全長44m・幅0.8～3 mで、深さ0.05mと非常に浅い。埋土中から、瓦器類281片、土師質皿40片、土師質羽釜8片、須恵質鉢1片、白磁4片が出土したが、図示できたものは次の1点である。

40-O S 出土遺物 第97図

40-O S 出土の白磁(414)は碁笥底状の小さな底部をなすもので、内底面にうすく艶のない灰白色(5Y8/1)の釉がかかっている。白磁の碗か皿と思われるが、今のところ森田分類に該当するものはない。

土壌

土壌が最も集中したのは44-O B 付近である。前にも述べたが、44-O B 付近は後世の削平のため本来の地形を失っている。そのため、かつて何基の土壌が存在したのは不明であるが、調査では4基確認した。これらの土壌のうち、切り合い関係からもっとも古いと考えられるのは48-O O で、47-O O ・46-O O と続くが、50-O O は前三者との前後が不明である。またこれらは、44-O B 廃絶以降につくられたものである。

55-00 第53・79図 図版19

調査区中央北端で検出した不定形土壌で、東西3.8m・南北5.5m・深さ0.4mをはかる。遺物の出土破片数は2004片と非常に多く、遺構の中で単位面積あたりの遺物量が最も多い。出土遺物の内訳は、瓦器椀・皿が最多で1332片、他に土師質土器が665片出土している。全体的に小破片が多いため、復元、実測できた遺物は、図示した12点のみである。

55-00出土遺物 第80図 図版49

瓦器椀(374~380)のうち(374)は、見込み部に平行状暗文が施され、口縁部内面にかろうじてヘラミガキが観察できる。(376)とともにC類に分類できる。また、(379)は器壁が他のものと比べ厚手である。高台形態に注目すると、断面形台形(374・377・378)・三角形(375)・半円形(376)がある。瓦皿(381~383)は、いずれもD類に分類できる。(391)の内面には、縦方向のヘラミガキが施されている。

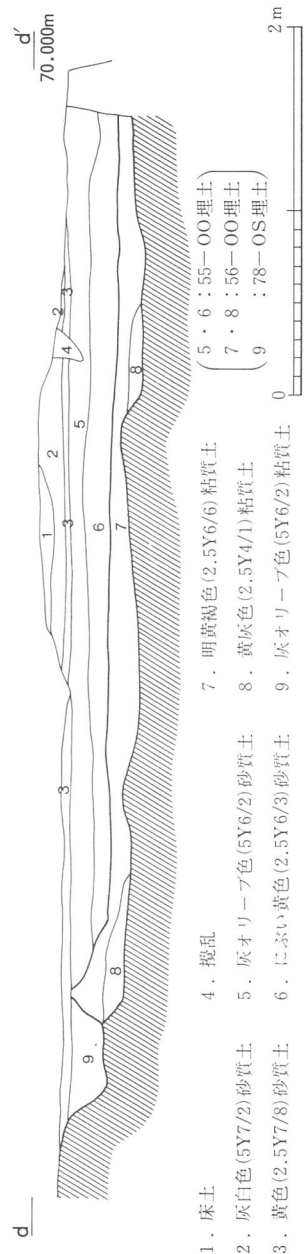
土師質羽釜は計109片出土しているが、口縁部の形態は(384・385)に代表される。いずれもB類に分類できるが(384)は口縁部がかなり短く、C類との中間的様相のものといえる。(385)の体部外面にはススが付いており、内面にも有機物の焦げた跡が認められる。

56-00 第53・79図

55-00の下面で検出した遺構である。55-00と同様不定形土壌で、規模は東西6.9m・南北5.7m・深さ0.18mをはかる。出土遺物は瓦器椀・皿、土師質羽釜がある。しかし65-00とは異なり、遺物量はさほど多くない。

56-00出土遺物 第81図

瓦器椀・皿は、201片出土した。瓦器椀(386~388)は、口縁部内外面はヨコナデ調整を加えるが、口縁部が外反するもの(387)としていないもの(386)がある。焼成・還元状態が悪く分類不可能である。高台形態は、断面三角形(386)と台形(388)がある。瓦器皿(389)



第79図 55・56-00断面図

は完形品で、D類に属する。焼成・還元状態は良好であるが、内外面とも器壁の剝離が激しく、内面の調整は一切不明である。

土師質羽釜は24片出土しているが、B類に分類できるもの(390)だけである。

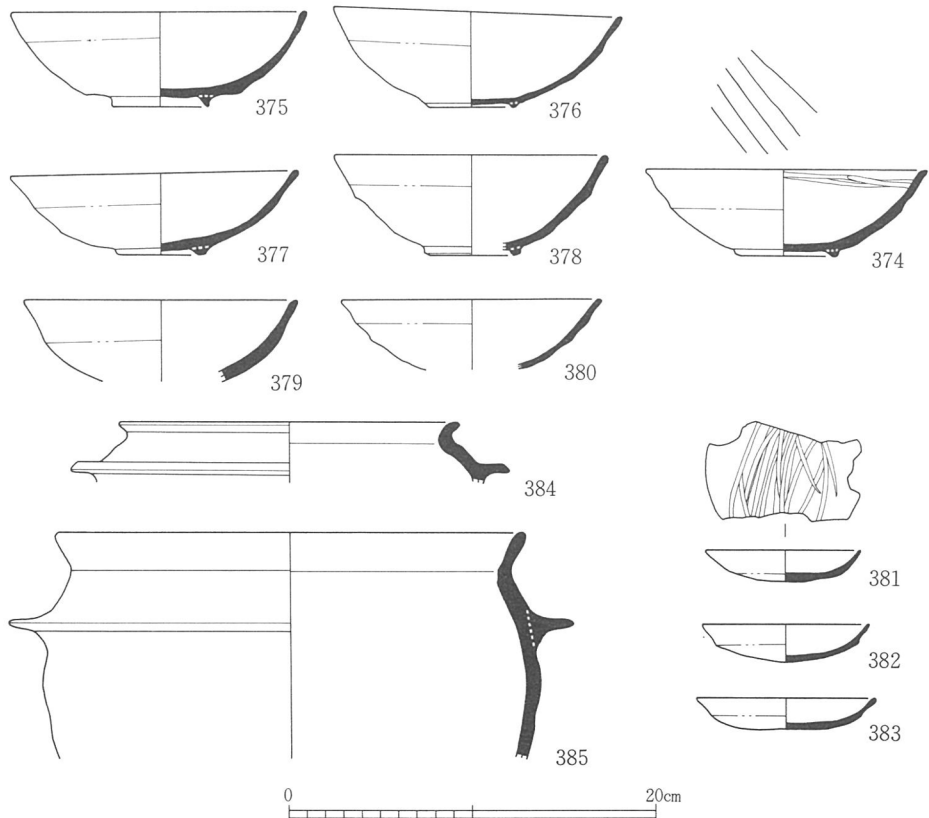
46-00 第53図

44-0B付近の土壌で最も新しいものと考えられる46-00は、東西4.5m・南北1.5mの規模を持ち、深さ0.1mをはかる。また西端部は削平によって一部削り取られている。遺物は瓦器碗などが出土した。

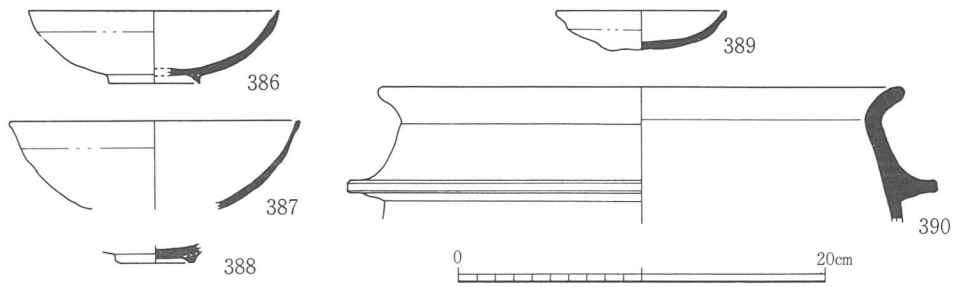
46-00出土遺物 第97図

瓦器類は101片、土師質皿は19片出土したが図示できたのは瓦器碗1点のみである。

瓦器碗(411)は、体部が非常に薄平で、高台の断面形は三角形を呈する。体部外面は未調整、内面はナデ調整を加えるが、ヘラミガキは観察できない。



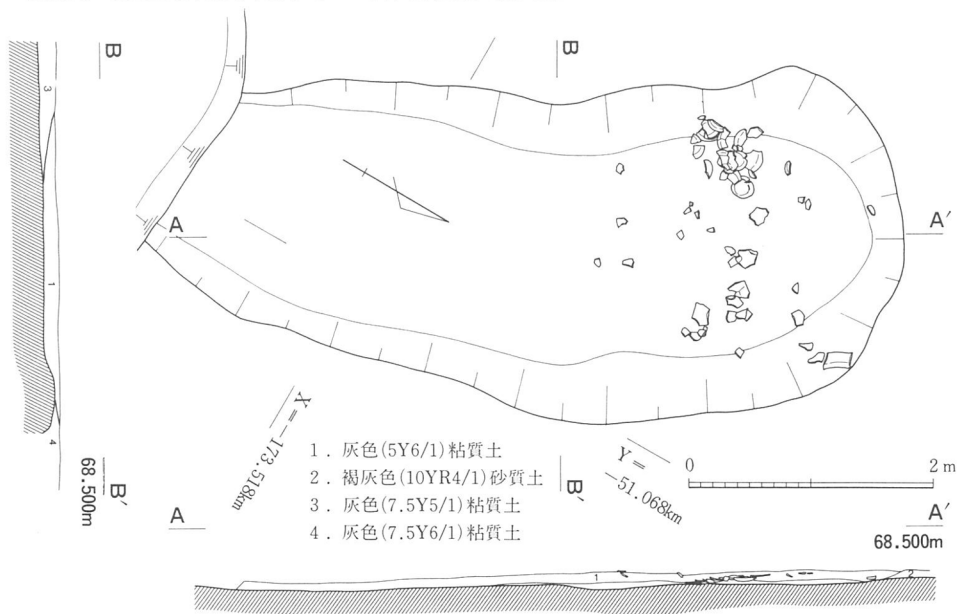
第80図 55-00出土遺物



第81図 56-〇〇出土遺物

47-〇〇 第53・82図 図版22

48-〇〇埋没後につくられた土壌で、規模は東西0.8~1.4m・南北3m・深さ0.15m、南端は攪乱のため破壊を受けている。出土遺物は瓦器碗・皿、土師質皿が床面より5~8cm遊離して出土した以外は、すべて床面直上である。

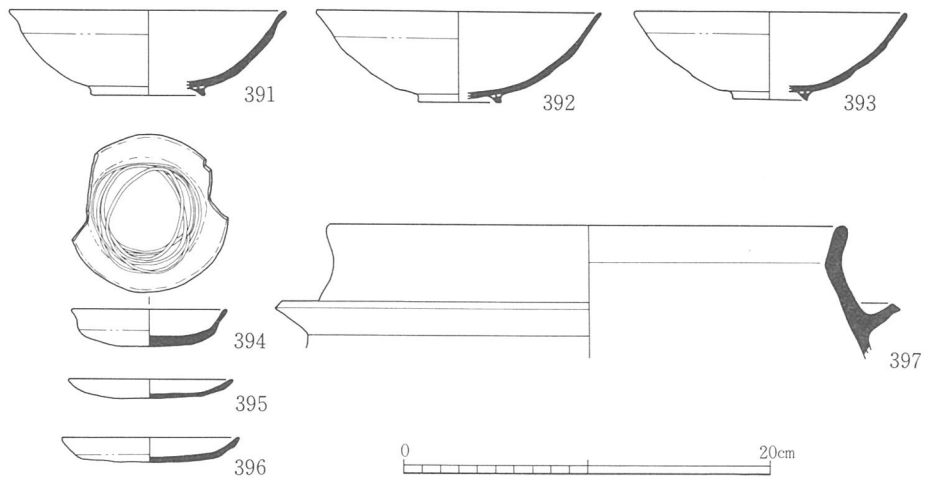


第82図 47-〇〇

47-〇〇出土遺物 第83図 図版49

瓦器碗・皿類は、189片出土した。瓦器碗(391~393)は、いずれも内面および口縁部外面にナデ調整を施すが、ヘラミガキ調整の有無は焼成軟質で器壁の痛み激しく不明である。D類に分類できる瓦器皿(394)は、内面に輪状にヘラミガキを繰り返す。

土師質皿は8片出土している。(395・396)は、瓦器皿に比べると概して薄手で、歪みも



第83図 47-00出土遺物

激しい。B類に分類する。

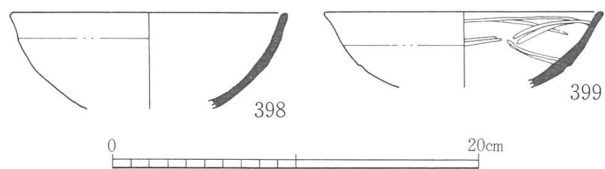
土師質羽釜は3片出土しているが、B類に分類されるもの(397)だけである。

49-00 第53図

径0.7m×1m・深さ0.25mの土壙で、44-0Bを構成する柱穴より新しく、46-00よりは古い。またその位置からみて、44-0Bの柱穴とは考えられない。埋土中から瓦器碗、土師質皿が出土した。

49-00出土遺物 第84図

瓦器碗は、2個体(破片数は41片)出土した。(378・379)は、ともに体部の破片で(379)の内面には粗雑なヘラミガキが観察できる。あるいはD類に属するものかもしれない。



第84図 49-00出土遺物

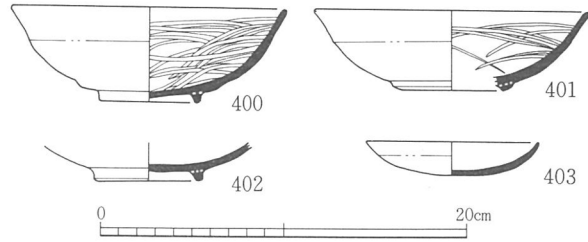
その他、土師質皿(破片数14片)も出土しているが、図化できる資料はない。

48-00 第53図

48-00は47-00に先行する土壙であるが、南端部は攪乱によって不明である。残存規模は、東西3m・南北3m・深さ0.06mをはかる。出土遺物には瓦器碗・皿がある。

48-〇〇出土遺物 第85図 図版49

瓦器碗・皿類は、4個体以上(破片数216片)出土した。瓦器碗(400~401)は、外面にはヘラケズリが施されているが、内面には観察できる。また(400)は、ヘラミガキが密に施されていることからC類に、また

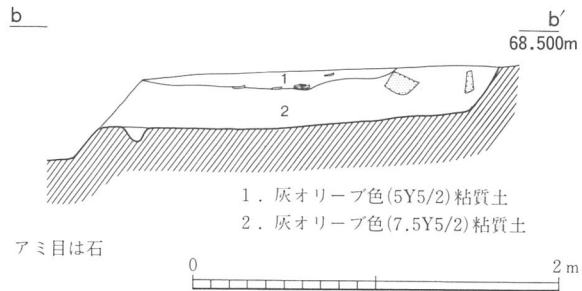


第85図 48-〇〇出土遺物

疎な(401)はD類に分類できる。高台部は、断面台形を呈する。瓦器皿(403)は、口縁部内外面はヨコナデ調整を加える。外面体部から底部にかけて未調整で、調整・未調整の境には明確な段がつかない。内面はナデ調整を施す。

50-〇〇 第53・86図

44-〇Bの南東隅で検出したが、削平によって西側が消滅し、本来の形状・規模は不明である。埋土には多量の炭・焼土が含まれる。現状では、東西2.4m・南北3m・深さ0.3mをはかる。



第86図 50-〇〇断面図

瓦器類228片、土師質皿61

片、土師質羽釜10片が出土したが、図示できるものは瓦器皿1点のみである。

50-〇〇出土遺物 第97図

瓦器皿(412)は、D類に分類できる。

井戸跡

54-〇W 第53・87図 図版23

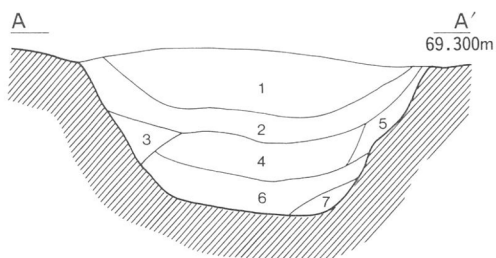
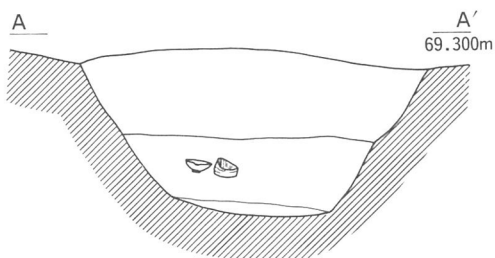
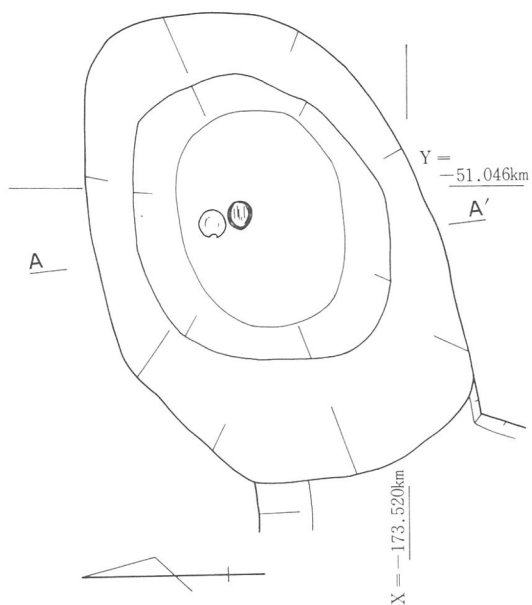
掘立柱建物53-〇Bの東側で検出した、長径2.8m・短径1.9mの楕円形プランを呈し、深さ約0.9mの浅い素掘りの井戸である。下半部の埋土には有機質が多く含まれ、特に4

層中には木材片や稲ワラが大量に含まれていた。図示した遺物で瓦器碗(404)および杓子は、第6層上面で出土したものである。

54-OW出土遺物 第88図 図版47

3個体出土した瓦器碗のうち、図示できたのは2個体である。井戸からの出土ということもあり、他の遺物に比べ、遺存状況は良好である。(404)はほぼ完形品で(406)の杓子と並んで出土した。ヘラミガキは外面体部中位まで、内面は底部も含め全面にわたりミガキを施している。(405)は、当遺跡出土の瓦器碗の中で最も焼成・還元状態に優れ、光沢を持つ。体部外面中位から内面底部までヘラミガキが施され、内面底部は平行状暗文が明確に残る。

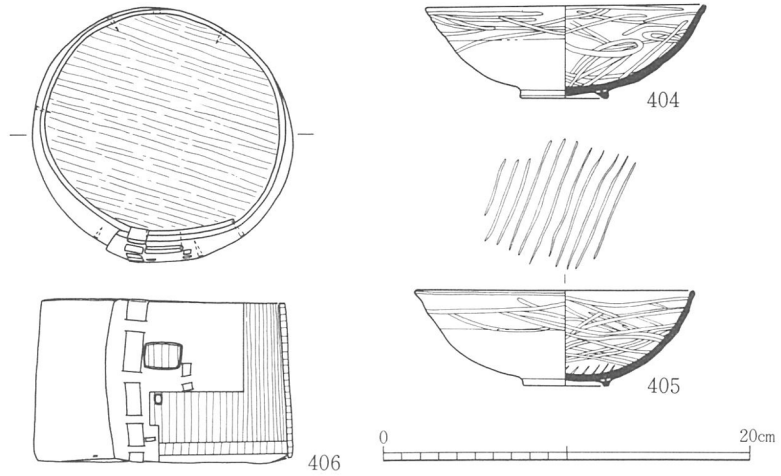
杓子(406)は柄の部分と口縁部の一部を欠いているが、ほぼ全容を知ることができる資料である。13.4cm×14cmの長円形の底板に幅0.4~0.6cm間隔の細い平行のシラビキを施した側板を巻き付け、二ヶ所を樺で綴じ底板とは六ヶ所の木釘で接合している。口縁部が底板より小さくなるように側板を綴じているため、側面観が台形を呈する。側板の綴じ目部分に2cm×



1. 明黄褐色(10YR7/6)粘質土
2. 灰色(5Y5/1)粘質土
3. 灰色(5Y5/1)砂質土
4. 灰色(5Y4/1)粘質土
5. 灰色(5Y5/1)砂質土
6. 灰色(5Y4/1)粘質土
7. 黄橙色(7.5YR7/8)粗砂土



第87図 54-OW



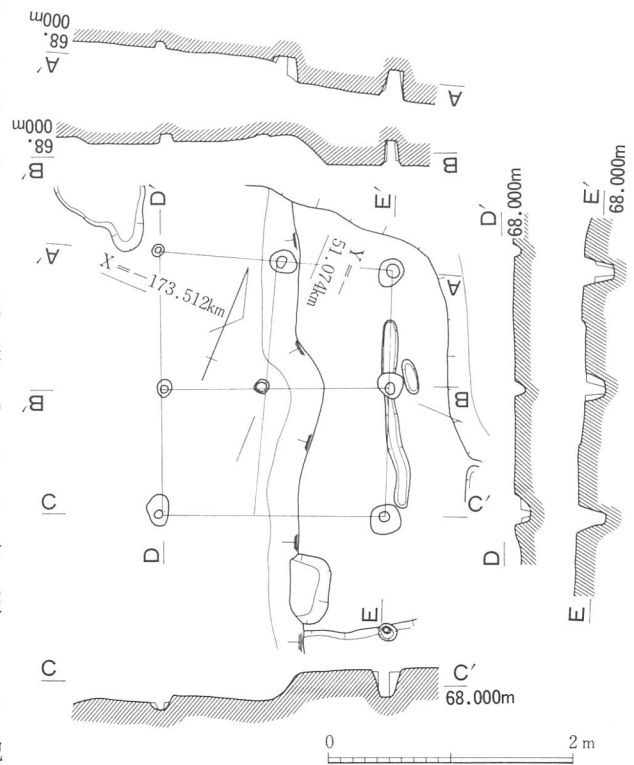
第88図 54-O W出土遺物

1.4cmの方形の孔を、対面には径0.6cmの円孔をあけ柄孔としている。柄の先端部が通る円孔の位置が、方形孔より低い位置にあるため、容器部に対して柄が上方に角度をもった構造になる。

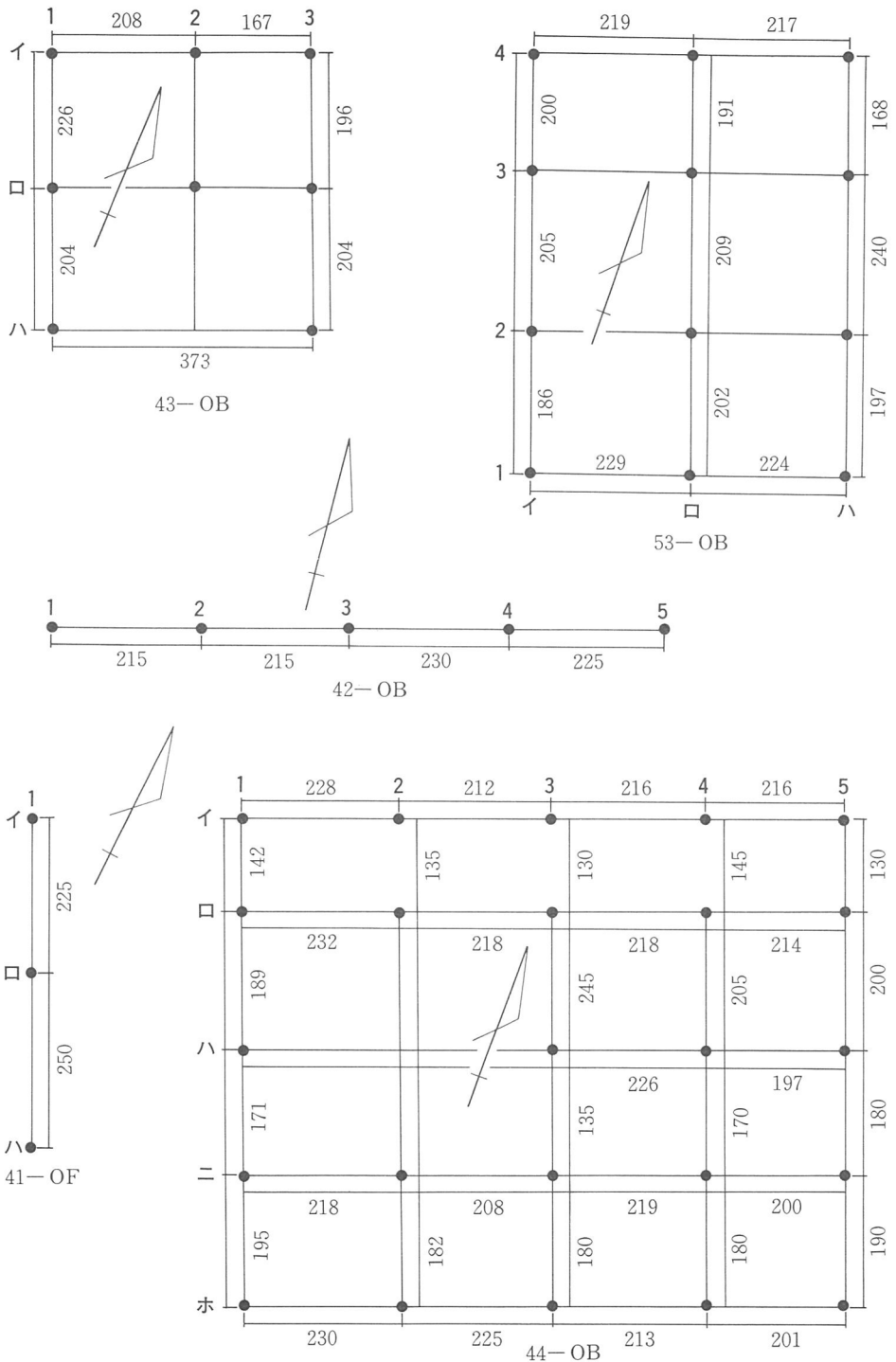
掘立柱建物 第89～95図
図版24～26

掘立柱建物群は、1棟の大型建物と2棟の小規模な建物で構成され、いずれも総柱建物である。柱列は、直線に並んでいるとは限らず、かなり左右に振るものもみられる。また柱の掘方は、直径28～60cmと比較的小型のもので構成される。

なお、柱穴の位置を表現するために、第89図の模式図中に記したように桁行を1～5の数字



第89図 43-O B

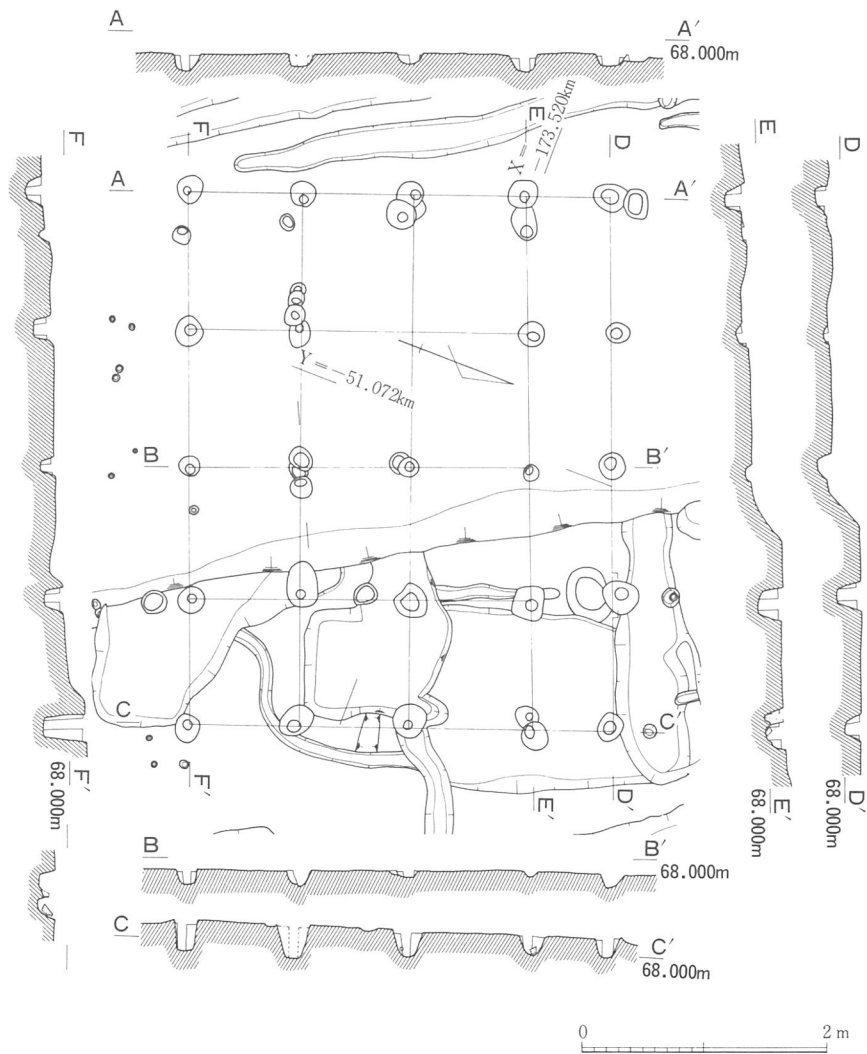


第90图 L地区43·44·53·42-OB·41-OF柱間模式図 (cm)

で、梁間をイ～ホの文字を用いる。例えば43-OBの東柱を表現するには「ロ2」となる。

43-OB 第53・89図 図版25

小規模な建物の1つである43-OBは、44-OBのすぐ北側に存在する。規模は、梁間2間・桁行2間である。54-OBと同様、建物西半分は後世の削平を受けている。そのため柱穴の1個は検出できなかった。建物の建て替えは見られず、桁方向N-21°-Wである。建物の平面積は16.2m²。柱穴内から若干の土師質土器、瓦器片が出土した。



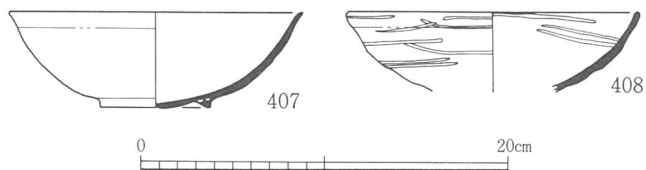
第91図 44-OB

44-O B 第53・91図 図版24・25

大型建物44-O Bは、梁間3間・桁行4間の規模を持ち、北側に庇を持つ。身舎と庇との間は、約1.3mである。本来は、緩やかな斜面に立地していたものと思われるが、後世の耕作地造成に伴う削平で、建物部分の2/3が削ら取られてしまっている。そのため柱穴の大半は、その底部付近のみが残存していた。また柱穴は、重複関係のみられるものがあり、建て直しが行われたものと思われる。建物の桁方向はN-20°-Wで、面積は61.6㎡。建物を構成するいくつかの柱穴の掘方から、瓦器碗・瓦器皿、白磁碗などが出土した。柱穴から礫が出土したが、出土状況から根石とは考えられず、むしろ柱を安定させるためのものと考えられる。

44-O B出土遺物 第92・93図

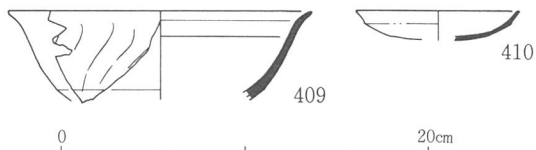
瓦器碗(407~408)は、柱穴「ホ4」から出土した。(407)は、焼成・還元不良のため調整が不明である。高台形は断面三角形



第92図 44-O B柱穴「ホ4」出土遺物

を呈する。(408)は外面にヘラミガキ調整が観察でき、B類に属するものであろう。

白磁碗および土師質皿は、柱穴「ハ1」から出土した。白磁は5片出土しているが、形態がわかるのは(409)だけである。(409)は口縁端部が尖り気味で外反し、外面に



第93図 44-O B柱穴「ハ1」出土遺物

ヘラガキ文、内面に沈線を巡らせており、森田分類では白磁碗V-2b類に相当する。

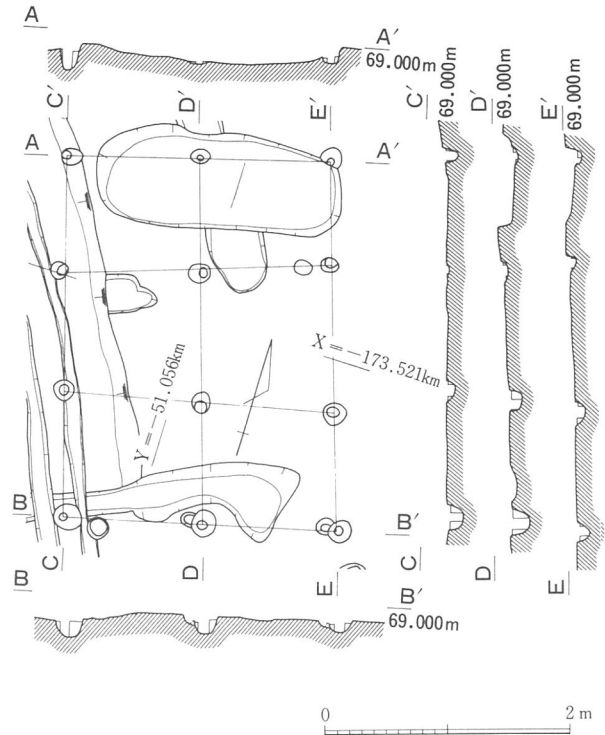
土師質皿(410)は、C類に分類できる。

53-O B 第53・94図 図版26

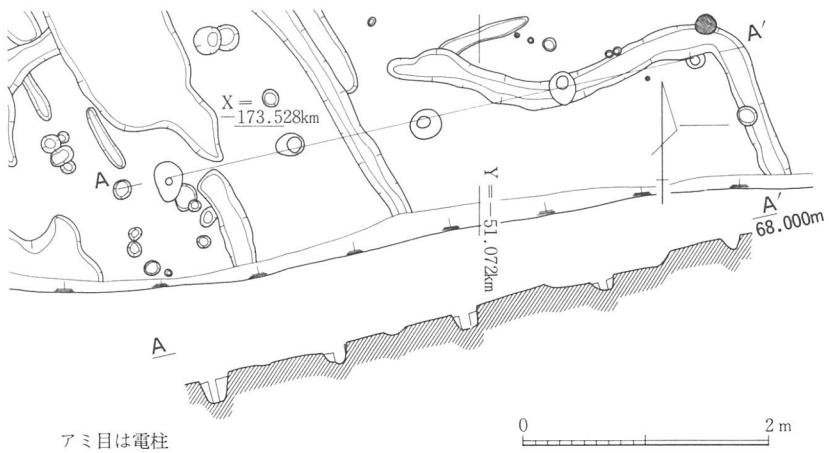
もう1棟の小規模建物53-O Bは、44-O Bの東側で検出した。規模は梁間2間・桁行3間で、南北棟である。柱穴には、重複関係が認められるものも存在することから、建て直しが行われたものと思われる。建物の桁方向はN-17°-Wで、面積は26.8㎡である。柱穴内から若干の土師器・瓦器片が出土したが、図示できるものはなかった。

42-O B 第53・59図

調査区南端で検出した掘立柱建物跡の一部と考えられる遺構で、柱穴4間分を確認している。柱穴「イ4」、「イ5」が45-O Sに切られているので、この溝に先行することは明らかである。この柱列の南側は、調査区の関係上柱穴を検出することが不可能であった。42-O Bの桁方向N-13°-Wである。柱穴から、土師質土器・瓦器片が出土したが、図示できるものはなかった。



第94図 53-O B



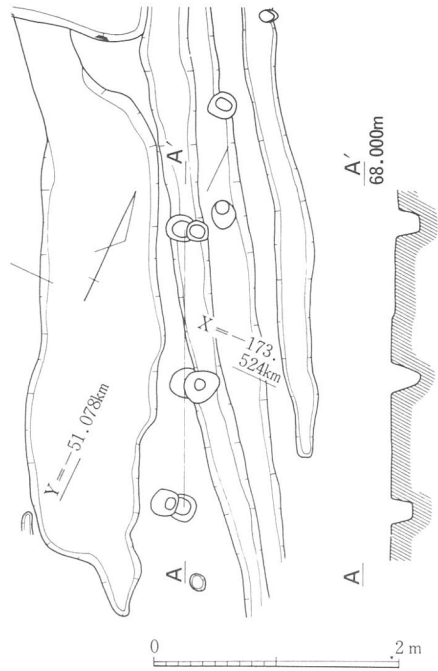
第95図 42-O B

柵跡

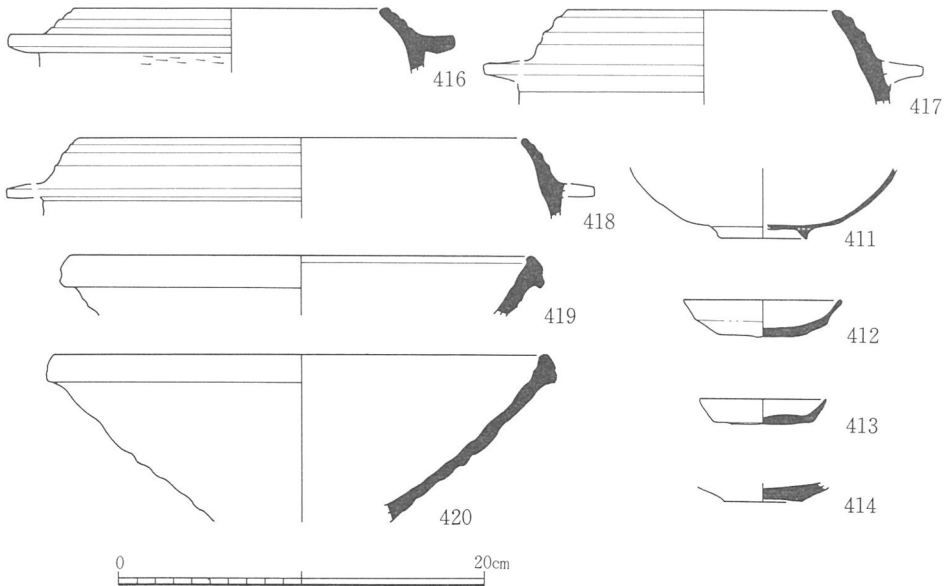
建物の集中する調査区南西端から、柵を1列確認した。掘立柱建物と同様、必ずしも柱列は直線に並ばない。

41-O F 第53・96図

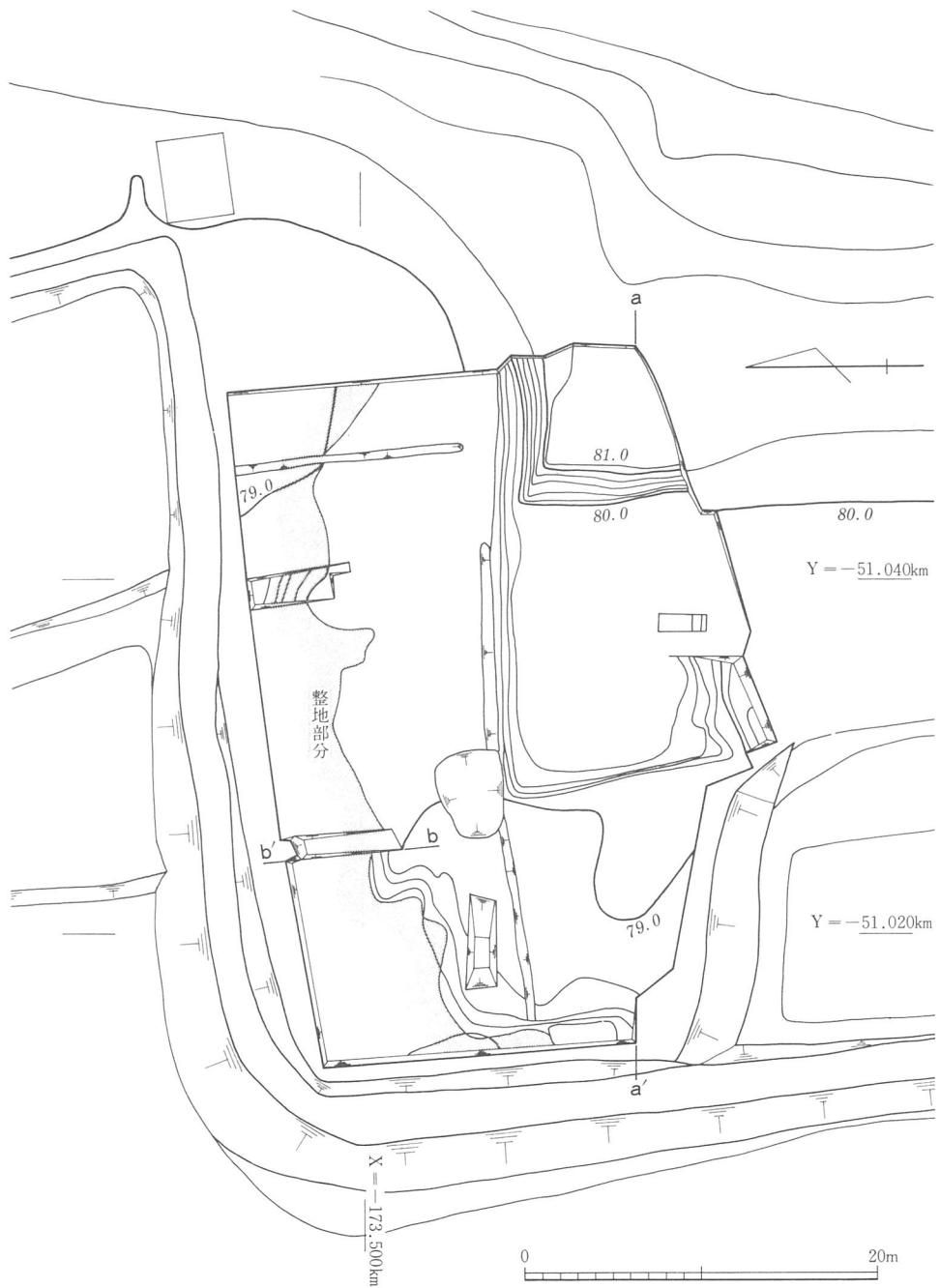
41-O Fは、3個分の柱穴を確認したが、周辺に対応する柱穴が存在しないことから柵と判断した。44-O Bの側柱とは約2 mの距離があり、ほぼその梁方向に平行する。2間分の柱穴は切り合い関係が認められ、建て替えが行われたものと思われる。主軸方向はN-19°-Wで、柱穴内から土師器片・瓦器片などが出土している。



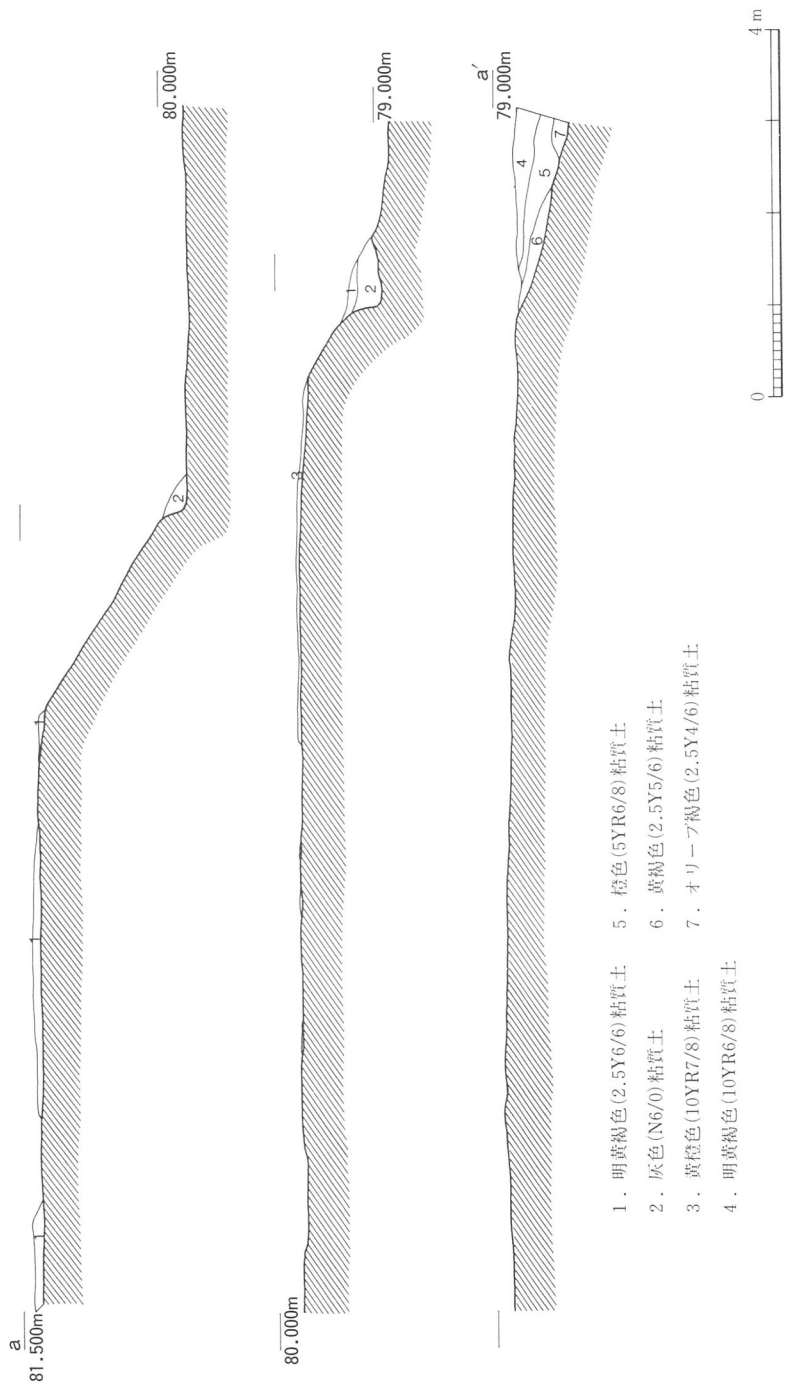
第96図 41-O F



第97図 その他の遺構出土遺物



第98图 M地区平面图

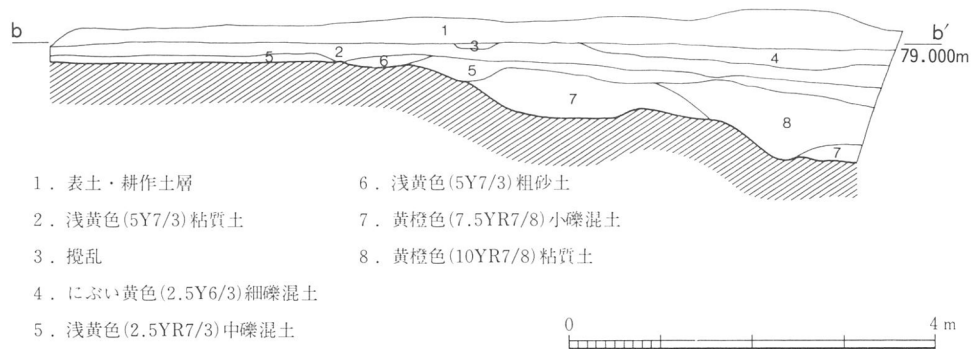


第99図 M地区断面図(1)

5. M地区

M₁地区 第98～100図 図版27（断面ポイントは第98図）

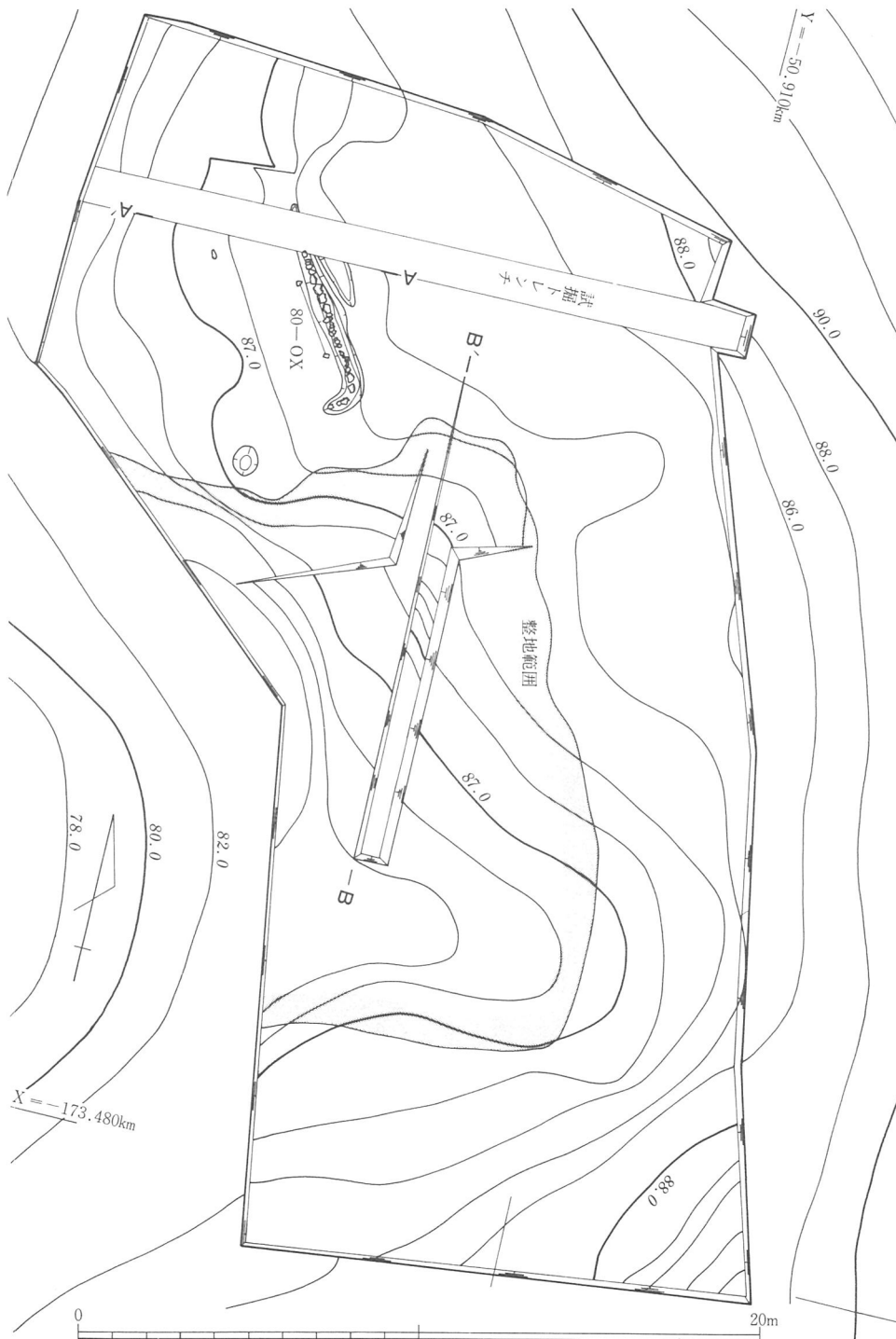
M₁地区は、和泉丘陵から派生した小尾根に位置し、標高78.2～81.2mをはかる。調査前は、東西約40m・南北約23mの方形の平坦地形を呈し、さらにその南東隅に東西6m・南北8m・高さ1.2mの方形の高まりがあった。調査直前まで耕作地として利用されていたものである。調査の結果、尾根の縁辺部は整地されていることが判明した。そこで縁辺部にトレンチを設定したところ、礫混じりの砂質土や基盤層系の粘質土を不規則に盛った状況が観察できた。特に北側はそれが深く、1.7mにも及んでいた。そのため整地土層をすべて除去せずに地山ラインを確認することにとどめた。一方、中央部は逆に平坦に削平され、表土を除去するとすぐに基盤層が露呈した。また南東隅の高まりの周囲には溝が掘削されていた。これらは、最近まで行われていた畑作のための耕地開発に伴うものと思われる。遺構は全く確認できなかったが、整地土層中から近世陶磁器・瓦類を中心とする遺物が出土したが、中には須恵器や中世瓦なども含まれていた。



第100図 M₁地区断面図(2)

M₂地区 第101～104図 図版28・29・51（断面ポイントは第101図）

和泉丘陵の山頂近くに造られた平坦地に立地する。平坦地は谷状の地形を埋め立てて造られており、東西15m、南北37mほどの規模で扇形を呈する。標高はおよそ88mをはかり、近年まで溜池を利用した水田耕作が営まれていた。平坦地は19世紀以降に造成されたく、整地状況の調査のために設けたトレンチ内第12層下部から伊万里焼の茶碗が出土して



第101図 M₂地区平面図

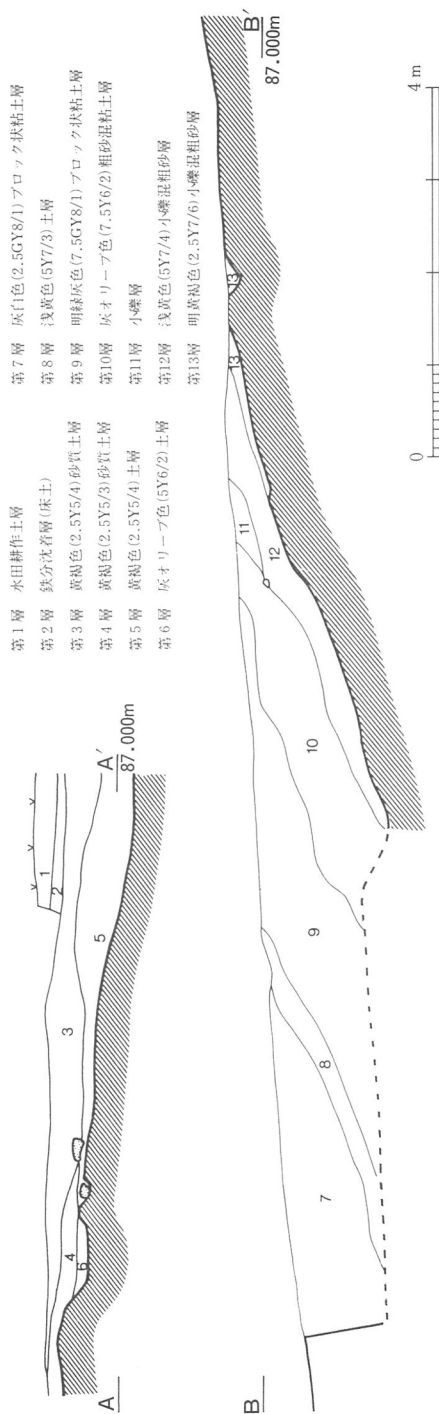
いる。

調査地の北部には、丘陵斜面を削平して小規模な平坦面を造っている部分が見つかり、そこから配石遺構と礎石が検出された。配石遺構80-O Xは幅約0.8m、深さ約0.38mの溝状遺構を掘削し、砂岩の川原石を並べたもので、一部を試掘トレンチで失っているが、長さ約6.5mの「L」字もしくは「コ」字状を呈するものと思われる。配石遺構に使用された石材は8cm×10cm大～20cm×35cm大のもので、偏平な石材が多用されており、遺構の北半部に大きめの石材が用いられる傾向が見られる。

配石遺構の西に接して、礎石と考えられる20cm×30cmほどの偏平な石材が2ヶ所で検出されている。礎石は推定される80-O Xの中央部に80-O Xと同一方向で並んでおり、礎石間の距離は約2.3mをはかる。

以上の配石遺構と礎石については、遺存状況が不良で詳細は不明であるが、小規模な礎石建物とそれに付随する雨落ち溝ないしは排水溝と考えられる。80-O X埋土の上部から土師質皿(423・424)が、遺構面を覆う第5層から瓦器碗(422)がそれぞれ出土している。これらの遺物はおよそ13世紀前後のものと考えられるので、80-O X及び礎石建物も当該時期のもの判断される。

この他、ピット状・溝状遺構が検出されているが、顕著な遺物の出土もなく、それらの詳細は不明である。



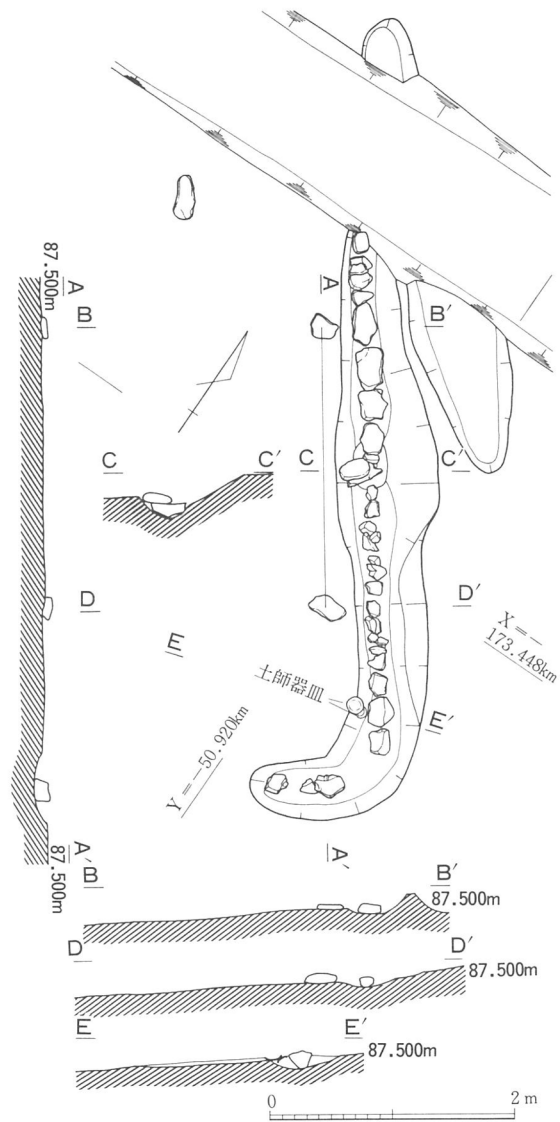
第102図 M₂地区断面図

M₂出土遺物 第104図 図版51

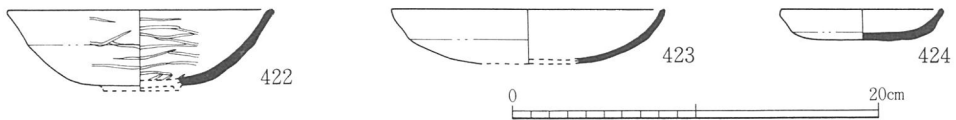
瓦器類49片、土師質皿158片が出土しているが、復元・実測できたものは以下の3点である。

瓦器碗(422)は遺存状態が悪く、焼成・還元とも不良であるが、体部内外面にヘラミガキが施されている。B類もしくはC類に属するものであろう。

土師質皿は、大皿(423)と皿(424)に分かれる。ともに体部内外面はナデ調整を加える。(424)はB類に属する。



第103図 80-O X



第104図 M₂地区出土遺物

注

- 1 中村浩ほか 『陶邑Ⅲ』 大阪府教育委員会 1978
- 2 広瀬和雄 『岬町遺跡発掘調査概要』 岬町教育委員会 1978
- 3 森田勉 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982
- 4 第1章 注1に同じ
- 5 宇野隆夫 「後半期の須恵器—平安京・京都出土品にみる中世的様相の形成」『史林』67-1 史学研究会 1984
- 6 第1章 注3に同じ
- 7 口縁部外面の段はないがE類に類似した形態の羽釜が、三木市宿原5号窯址出土品にある。
『兵庫県三木市宿原5号窯址確認調査概要報告』 三木市教育委員会 1979
- 8 第1章 注3に同じ
- 9 五十川伸矢 「平瓦の数量計測方法の分析—生産遺跡出土平瓦の場合—」
『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』 京都大学埋蔵文化財研究センター
1986
- 10 無台形態の杯・皿を杯A・皿Aと呼ぶ。
- 11 『平城宮発掘調査報告Ⅱ』 奈良国立文化財研究所 1962
- 12 『芝ノ垣外遺跡発掘調査報告書』 大阪府教育委員会・(財)大阪府埋蔵文化財協会 1987
- 13 『京都府発掘調査概報集 1975』 京都府教育委員会 1975

第Ⅳ章 遺構・遺物の検討

第1節 遺構 第105図

11世紀以降の顕著な遺構は、K地区、L地区およびM₂地区で検出した掘立柱建物跡・井戸・溝・土塋などである。これらは、当時調査区一帯に集落が展開していたことを物語る資料である。今回検出した遺構群は大きく三期に分れるが、その中心は第Ⅰ期である。

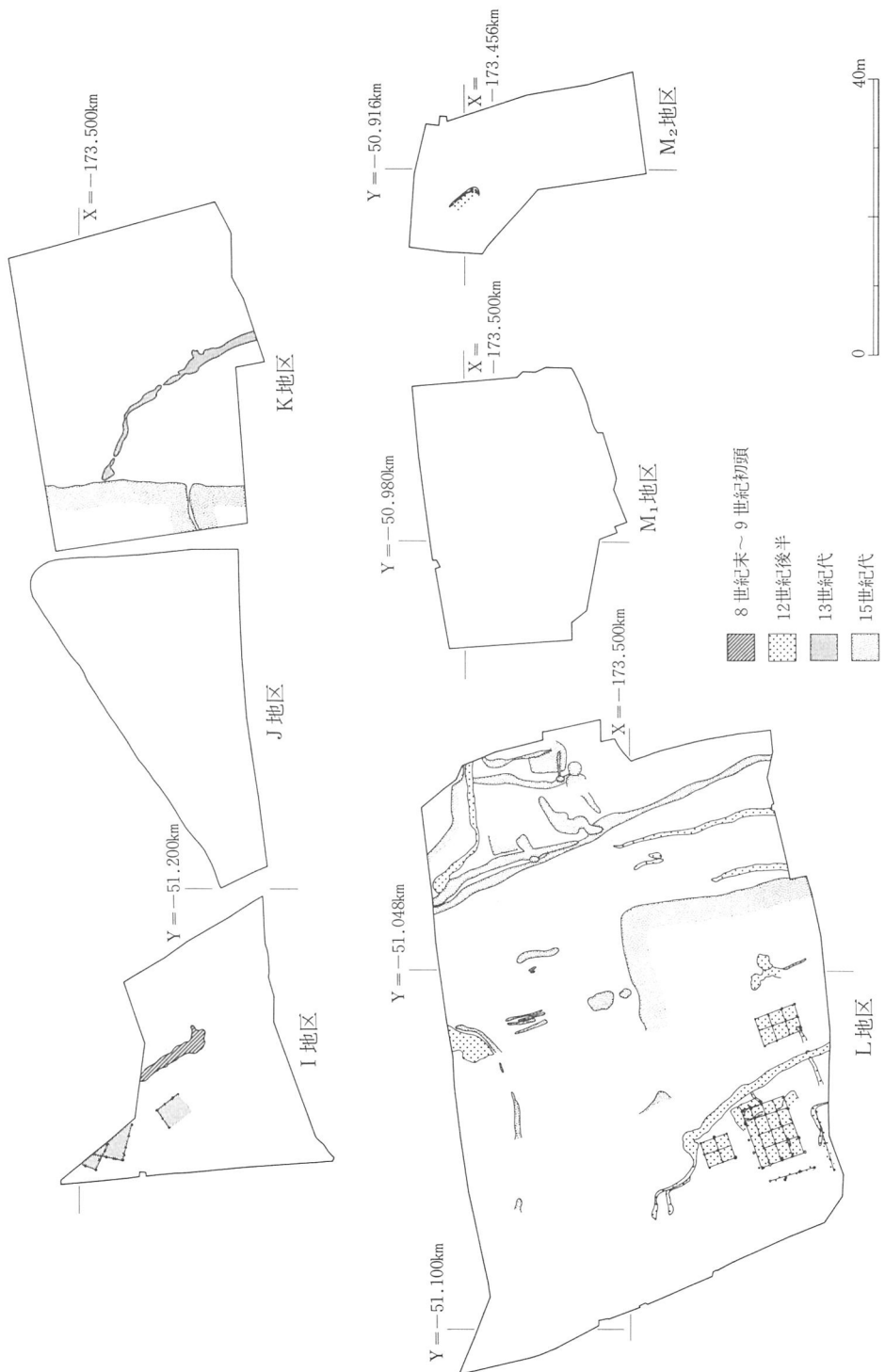
第Ⅰ期は、出土遺物から見て12世紀後半代を想定する。この時期の遺構群は3つの小期に分かれる。第Ⅰ-1期の遺構は、後に詳しく述べるが、Ⅱ-1期の瓦器碗を出土した45-OSに先行する42-OSである。この建物はL地区南西端で検出したが、他に同時期と考えられる遺構はない。おそらく遺構の中心は、調査区南端で広がるものと予想される。

第Ⅰ-2期は、45-OB廃絶後、43・44・53-OBと41-OF、54-OW、51-OSが相次いで作られる。この建物・柵の主軸方向はほぼN-20°-Wで、42-OBのN-13°-Wとは若干方位を異にする。またM₂地区で検出した礎石建物跡も、この頃に建てられたものかもしれない。42-OBの存続期間を決定する資料に欠くが、出土した瓦器碗から見て、これらの建物跡は、それほど長期間にわたって存続したものではないと考えられる。

第Ⅰ-3期の遺構は、これらの遺構群が廃絶した後44-OB周辺に土塋(46・47・48・49・50-OO)が次々に営まれ、その他55・56-OOや61-OSなども作られる。このうち47-OOは、土器の出土状況からみて、土塋墓の可能性が高い。これ以上L地区内では、15世紀代に入るまで時期の判明する明確な遺構を検出することはできなかった。

第2期と考えられる遺構は、I地区で検出した建物跡である。I地区は全体的に大規模な削平を受けているため、建物跡の正確な規模や時期、その他の関連する遺構についての情報を得ることができなかった。この3棟の建物跡はL地区のそれとは違い、主軸方向がばらばらで、側柱建物である。いずれにしる集落の中心は、西側へと移動したことになる。当該期は13世紀代と考える。

第3期になると今回の調査区に建物跡は存在しない。確認できた遺構は、J地区からK地区にかけて検出した水田跡、L地区内の水田跡や溝・土塋である。集落の中心地は調査区外になり、調査区はもっぱら生産の場となる。出土遺物から見て、15世紀前後の時期を想定する。



第105図 時期別遺構配置図

第2節 11世紀以降の遺物

1. 瓦器碗・皿、土師質皿の編年

A 瓦器碗の編年 第106図

山直中遺跡から出土した瓦器碗は、ほとんどが和泉型瓦器碗である。尾上実氏は近年南河内の瓦器碗の研究に際し、かつて橋本久和氏が指摘したように、器形・調整・焼成・胎土において、和泉型瓦器碗との間に差は認められないと述べた⁽¹⁾。そこで本稿では氏の4期にわたる時期設定を用いて、当遺跡出土の瓦器碗を分類する。氏の研究によると、I期からII-3期にかけての瓦器碗は法量で分類することが不可能に近く、内外面の調整によってのみ識別できると指摘する。その傾向は、特にII~III-1期にかけて著しい。さて、前章でも述べたとおり、当遺跡の瓦器碗は、その大半が焼成・還元不良で、遺存状態も決してよくない。そのため、遺構の中心時期を占めると考えられるII~III-1期の瓦器碗の分類は、不十分なものにしかなかった。

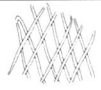
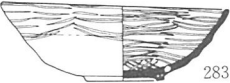
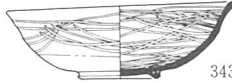

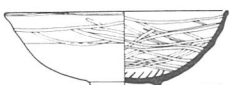
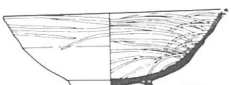


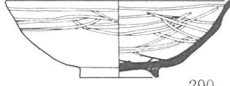
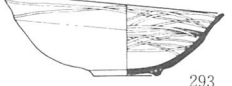

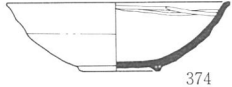
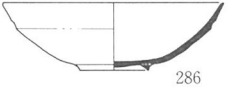
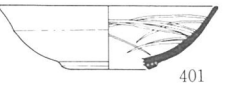



まず調査の方法で分類した瓦器碗は、見込み部に暗文を施すかランダムな磨きを施すかによって二分できる(第106図)。

A類に該当する資料として確認できるのは、(283)と(343)である。外面体部上半に施されるヘラミガキには、分割性が認められる。尾上編年では、II-1期の特徴を持つ。

B類になると、体部外面上半及び内面にはヘラミガキが施されるが、分割性は認められなくなる。尾上編年のII-2~3期に相当すると考えられる。また、当期の特徴として外面にヘラミガキが残り、高台が断面三角形になるとされていることから、44-OBの柱穴「ホ4」掘方出土瓦器もこの時期のものと考えられる。

C期は、外面のヘラミガキのないものが出現する。(290・293)は外面のヘラミガキが観察できるが、B期のものと比べると簡略化され、また内面のヘラミガキも粗雑化傾向にある。一方、(292・294・400)はいずれも外面のヘラミガキが消滅している。これらからみて、両者は同一時期と考えるが、前者の方がやや古い要素を持つものと思われる。ここに示した遺物以外で、高台・器高とも低くなる47-OO出土瓦器も、当期もしくは次の段階に入るものと考えられる。尾上編年のIII-1期に該当する。

D期の特徴は、急激な器高の低下を指標とするが、図示した瓦器碗は器高がいずれも5cm以下である。ともにもはや外面にヘラミガキは存在せず、内面のヘラミガキは非常に粗雑なものしか施されない。高台形も丸みをおびた粗略なものになる。また口縁部外面のヨ

A	  283	 343	
B	  405	 360	 404
C	  290	 293	
D	  374	 286	 401
E		 51	
F		 71	
G		 72	

第106図 瓦器碗編年

コナデ調整が2段になるものがみられるようになる。55-OX出土(376)も当期に属するものと思われる。

E期の瓦器は1点確認されたにすぎない。復元口径は12cmであるが、残存高は3.6cmと器高が高く、他に類例のない特異な碗である。時期決定を行う要素に乏しいが、前後の段階と器高・口径について比較すると、D期とF期の間におさめてもよいのではないか。

F期に入ると、器高の低下が著しく、高台は痕跡程度のものになる。内面に簡単なヘラミガキが施される。尾上編年Ⅳ-2期に相当する。

G期の瓦器には、もはや高台は伴わない。器形的には、F期の瓦器をさらに簡略化したものととらえることができるが、内外面の調整は比較的丁寧なものとなっている。このような特徴は、尾上編年のⅣ-4期に該当するものと考えられる。この1点のみ出土。

次に年代についてふれる。尾上氏は年代を知る手掛かりは少ないとしながらも、次のような資料を提示する⁽²⁾。大阪府藤井寺市国府遺跡からⅡ-2期に属する瓦器碗が、1172年(もしくは1174年)の墨書を持つ木簡とともに出土した。神並遺跡では、Ⅲ-2期の和泉型瓦器碗が、1243年頃に考えられる大和型瓦器碗とともに出土した。瓦器碗の終末は地域差があり、一律に消滅しなかったのではないかと述べ、藤井寺市挾山遺跡ではⅣ-4期の瓦器碗が、初鑄が1408年の永楽通宝と共伴した例をあげる。

これに対し、神並遺跡報告書では、尾上編年に対し次のような意見を述べる⁽³⁾。まず、西ノ辻遺跡でⅢ-2期の和泉型瓦器碗と共伴するとした大和型瓦器碗は、口径・内面のヘラミガキなどから1型式先行するものとし、13世紀前葉に比定する。また、「井戸7」から出土したⅣ-4・5期の資料が、元徳2年(1330)銘を持つ木簡とともに出土した。しかし、この資料自体若干幅を持つことから、14世紀中葉から後半頃の年代を与える。

瓦器碗は、現在のところ具体的な年代を示す資料に恵まれず、特にその終末に近づくほど著しい。ここでは、尾上氏の年代観とⅣ期の年代を示す資料が出土した神並遺跡編年とを提示した。

B 瓦器皿・土師質皿の編年

瓦器皿は瓦器碗に比べて形態的・手法的変化に乏しいため、瓦器碗ほど時代性を反映するものではない。そこで最近の成果として東大阪市神並遺跡例を参考にしたい⁽⁴⁾。ここではまず瓦器碗の型式分類を行った遺構で共伴した皿を検討した。それによると、尾上編年Ⅱ-1期に属する遺構から出土した皿は、内外面にヘラミガキ調整が施されている。Ⅱ-3

期になると、外面のヘラミガキは見られず、同時にⅢ-2～3期の遺構では法量の縮小傾向が見られるという。また、瓦器皿を形態的特徴から以下の4タイプに分類する。

- ① 平底から屈曲して口縁部が外上方に立つもの。
- ② ①に似るが、薄手で口縁端部がさらに外方に向くもの。
- ③ やや丸みを持つ底部から口縁部までまだらかにつづくもの。
- ④ 丸底、口縁部は底部との境に稜を残して、外上方に立ち上がるもの。

これらの特徴を時期別に見ると、Ⅱ-1期では①②④が、Ⅱ-3期では①②③④がみられ、その中でも口径の小さいものには①②がみられる。しかし、ここで検討した資料は、大和型と推定した瓦器皿が中心で、和泉型と考えられる皿は④のみである。

さて、当遺跡出土の瓦器皿も瓦器碗同様焼成・還元状態が不良で、調整手法で分類することはほとんど不可能である。そこで、瓦器皿の口縁部・体部・底部の形態的特徴から6タイプに分類を行った。

A類としたものは1点出土したにすぎないが、内外面に分割性のあるヘラミガキ調整が施されたもので、おそらく12世紀代でも古く位置づけることができるであろう。

これに対し、E類はいずれも包含層出土資料であり、年代を知る手掛かりはないが、B～D類に比べ法量が縮小傾向にある。さらにF類は最も法量が縮小した器形であるが、E類同様遺構から出土したものでないため、瓦器碗との共伴関係が不明である。形態的には、最も新しいと考えられるが、絶対年代を比定する根拠を持たない。

B～D類は、その中間に位置づけられる資料で、(350・381)の内面にのみヘラミガキが施されている。各々類型した瓦器皿の出土遺構をみると、量的な問題はあるが、法量的には各遺構ごとに比較してもほとんど差がない。しかし、瓦器碗の微妙な型式変化と必ずしも一致しないが、瓦器碗編年からⅡ-1～Ⅲ-2期に属すると考えられる資料である。各類型はおそらく併存関係にあったと考えられ、その中で法量を徐々に縮小していったものと思われる。

土師質皿は、瓦器皿と異なり調整手法である程度の時期を推定することができないので、瓦器皿同様、形態的特徴から4タイプに分類した。しかし、瓦器皿に比べさらに資料数が少なく、遺構出土例もわずかでもあるため、瓦器皿以上に編年することは困難である。

さて、遺構から出土した形態はA～C類に限られる。これらに共伴した瓦器碗はほとんどがⅡ-1～Ⅲ-1期に属するが、土師質皿もその変化に対応するものではない。次に法量に注目すると、A～C類は口径9cm前後、器高1.5cm前後である。またA～C→D→E

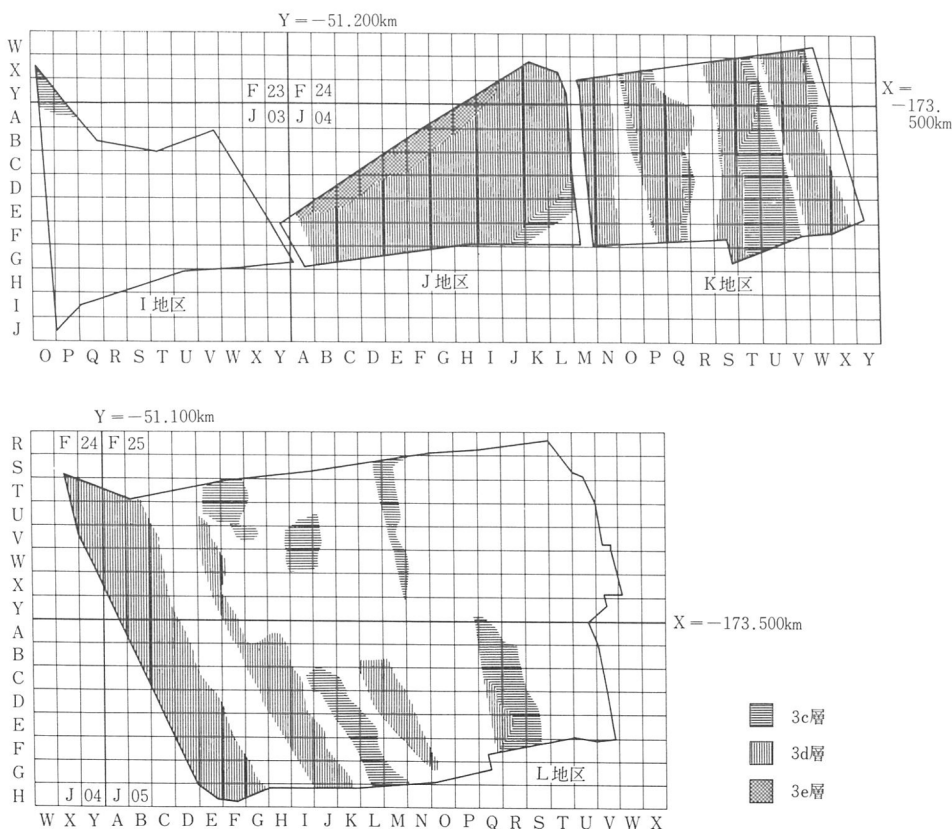
の順に法量の縮小傾向が認められ、例えばB形態に分類した(413)のような皿もあり、各形態内での法量差は存在する。高槻市上牧遺跡出土の土師質皿の分析によると、土師質皿の法量から、おおよそ100年単位での編年が可能であるという⁽⁵⁾。それに従うと、A～C類は12世紀代に、D・E類は14世紀代に位置づけられる。

いずれにしろ、当遺跡出土の瓦器皿・土師質皿とも資料数が少ない。今後、泉州地域での良好な資料を用いての再検討が必要である。

2. 遺物の出土状況の検討

A 出土遺物の平面的分布状況の検討 第107～111図 第3表

山直中遺跡では、特に良好と考えられる包含層(3c～3e層)が第107図に示すようなかたちで検出できた。そこで指標となるべき遺物がどのように分布するかについて、包含層



第107図 山直中遺跡包含層分布図

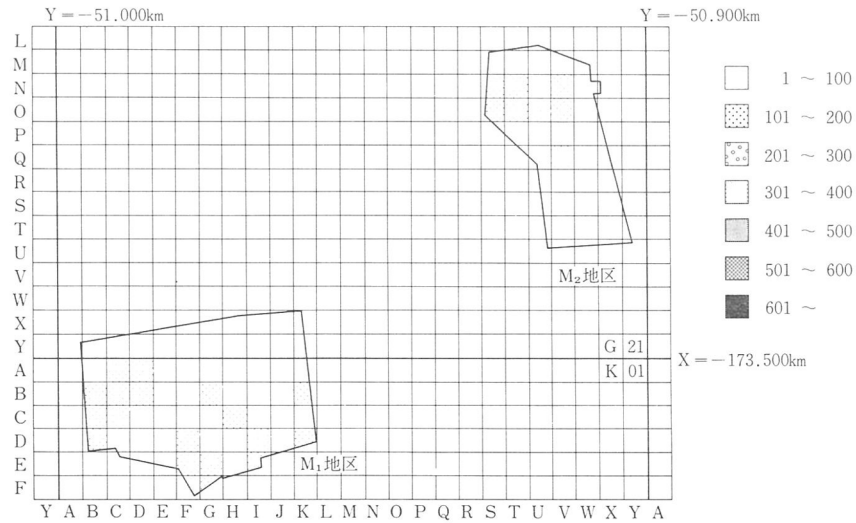
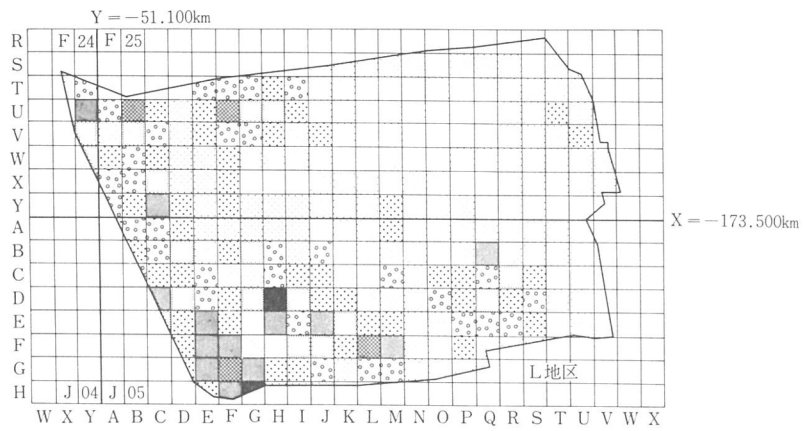
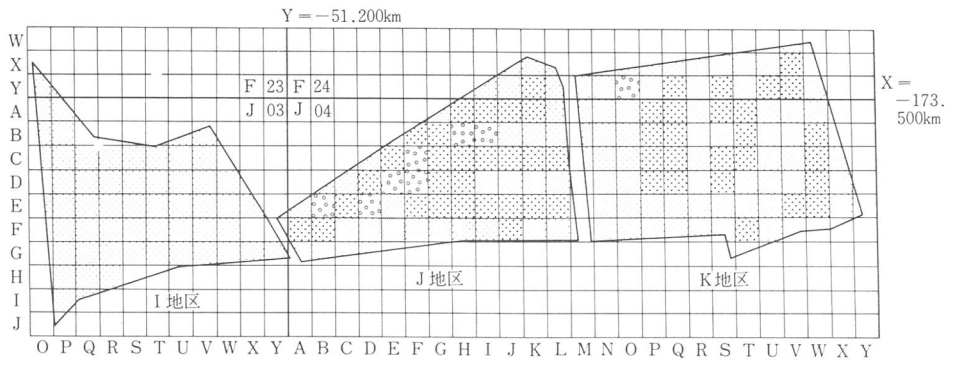
に含まれる多量な遺物片の水平分布に主眼を置き、遺構とどのような関係を持っているかを検討した。なお、包含層出土遺物に限定したのは、遺構出土遺物をも含めてしまうと、当然のことながら遺構集中地区に遺物点数も増加するからである。

まず、各地区における包含層の遺物分布状況を出力したが、その結果を示したものが第108図である。I地区は先述のとおり全体的に包含層が削平され、破片数も50以下の所が大半である。これに対して、最大で80cmもの包含層の堆積が認められたJ・K地区には350片近くの遺物が出土した地点もあり、全体的に遺物量はI地区より多い。さて、最も遺構が集中していたL地区では、傾斜の変換点である西端部に多量の遺物が認められる。また、削平されたと考えられる調査区中央部付近では、遺物の散布も希薄である。和泉丘陵斜面に当たるM地区では部分的に遺物を出土する地点はあるものの、総じて皆無の部分が多い。

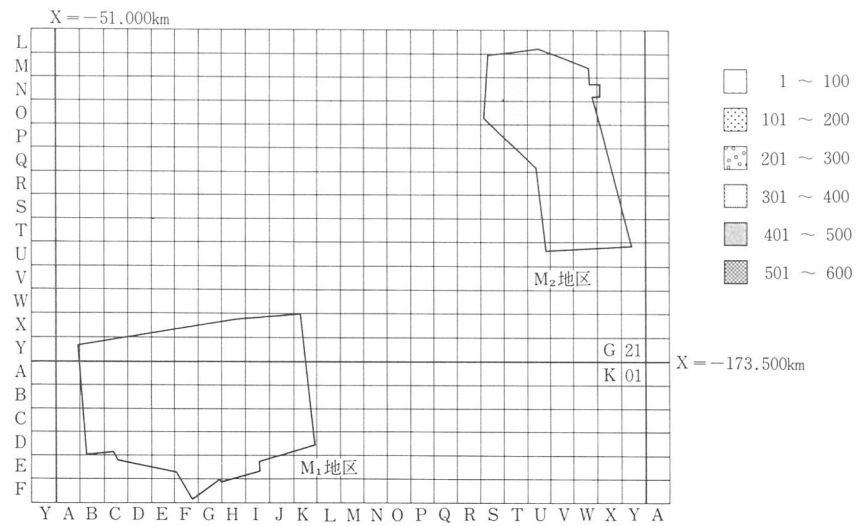
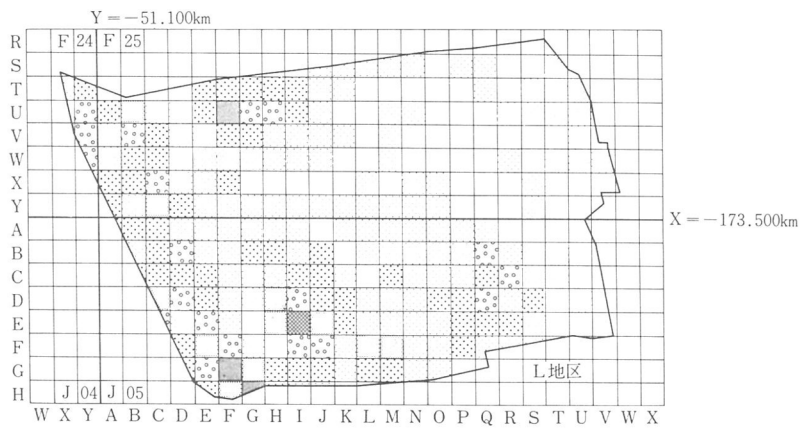
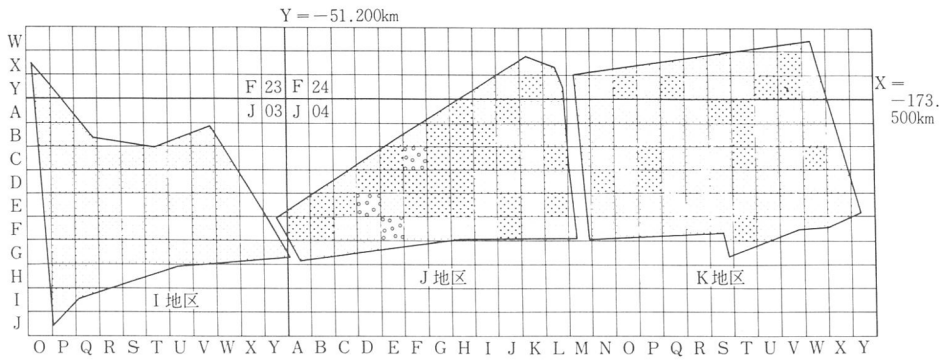
以上処理を通じて得られたデータを参考にしつつ、瓦器碗・皿、瓦質土器、須恵器の分布状況を検討する。この3種類の土器を対象とするのは、瓦器碗、皿、瓦質土器が各々中世前半・後半を、須恵器が古墳時代～古代を代表する遺物と考えられるからである。その他これらの土器は大まかな時代を推定するに十分であること、各々の個体識別が容易で一定の破片数があることなどである。これに対して、土師器は古墳時代以降、量の多少にかかわらず普遍的に存在する遺物であるため、厳密に区分けしない限り今回の方法では不適當である。

まず瓦器の分布密度を見てみよう(第109図)。全体に削平を受けているL地区中央部を除き、瓦器碗・皿の分布が認められる。特にL地区西端では密集し、中でも遺構の集中する南西部に多量の破片が確認されている。しかし、これだけであれば傾斜の変換点に流れ込んで堆積したとも十分考えられる。また、後世の耕作地造成に伴い多かれ少なかれ削平を受けたため、分布にばらつきがみられるとも考えられる。いずれにしろ、この瓦器の分布がかなり広範囲に、また第3表で示すとおりI・M地区を除く各地区とも50%以上みられることは、当地にいわゆる中世遺跡の存在を如実に示すものである。

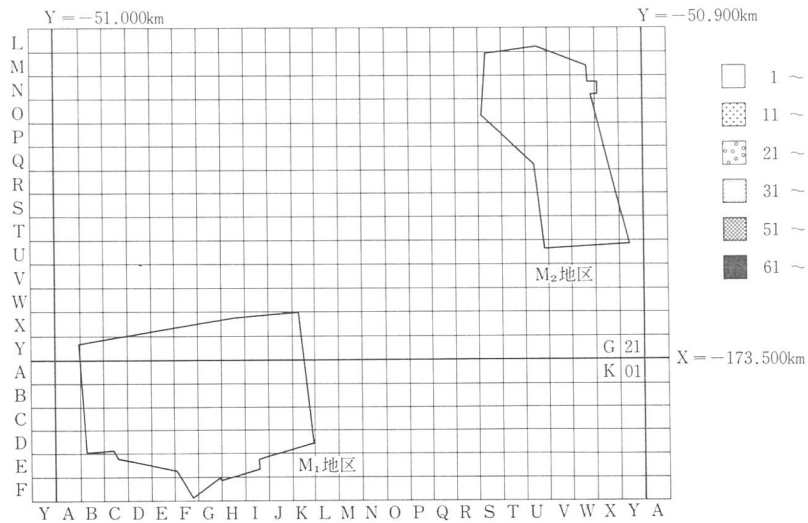
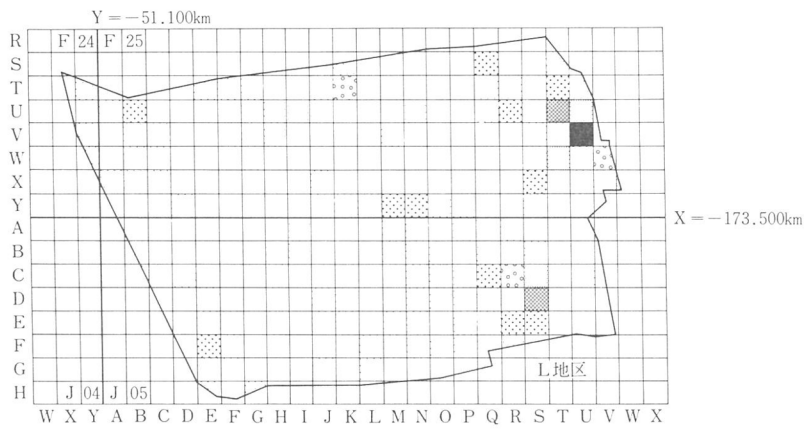
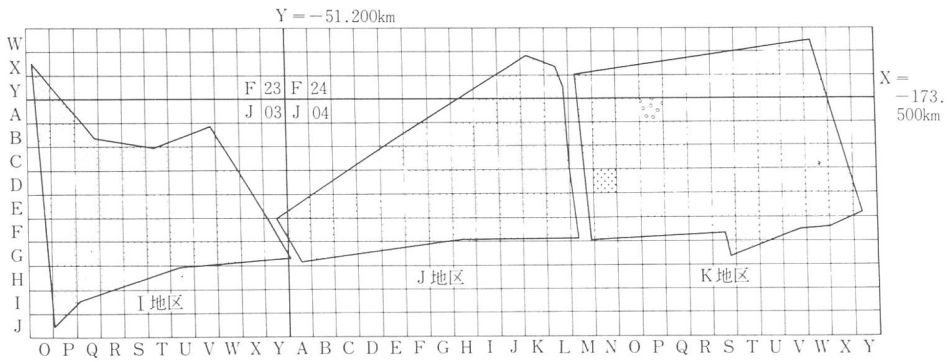
次は、瓦質土器である(第110図)。瓦質土器の分布範囲・密度は、かなり特徴的な傾向を示す。それは、L地区52-O S付近及び調査区東端と、いずれも15世紀代の遺構が存在する所に比較的集中する。特にL地区東端部は、L地区内で最も標高の高いところであるにもかかわらず、調査区全体の中で最も集中するところである。おそらく周辺の未調査部分に15世紀代の遺構が存在するのであろう。この傾向は、15世紀代と考えられるJ地区～



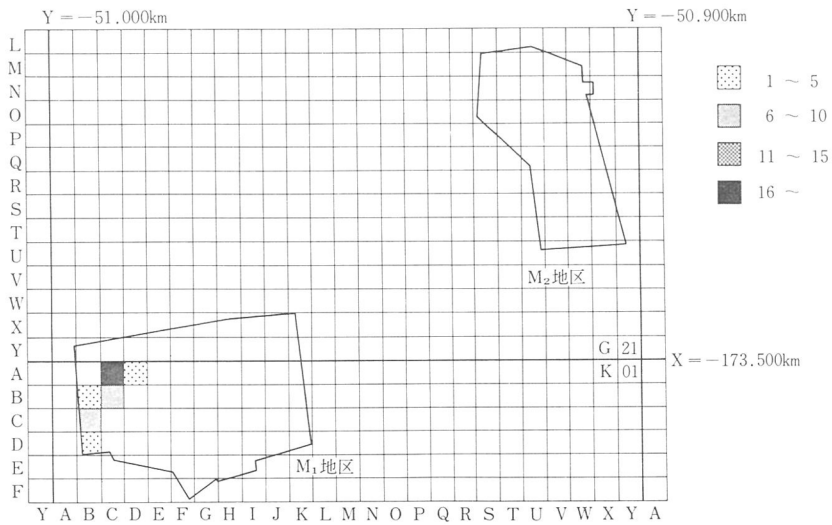
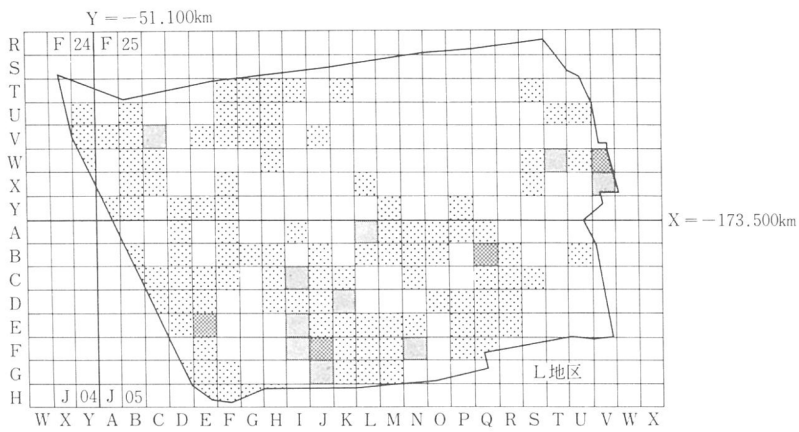
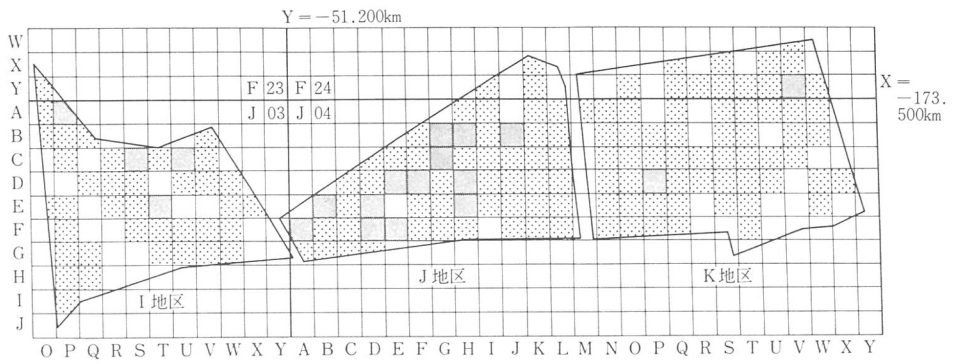
第108図 包含層出土遺物の平面的分布状況



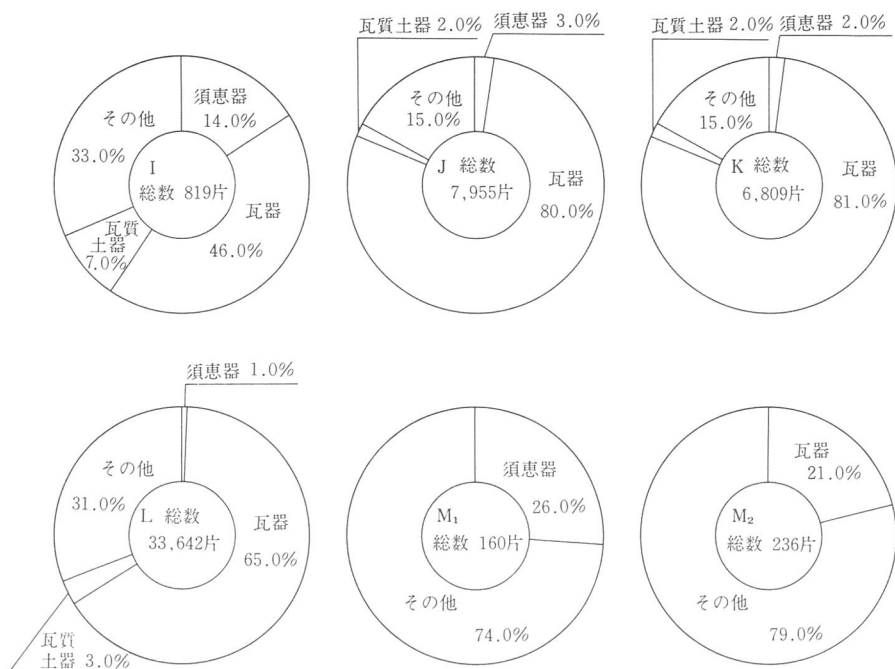
第109図 包含層出土瓦器類の平面的分布状況



第110図 包含層出土瓦質土器の平面的分布状況



第111図 包含層出土須恵器の平面的分布状況



第3表 地区別の遺物構成表

K地区にまたがる水田跡付近にも認められる。また、遺物量の少ないI地区にも認められる。

須恵器はどうであろうか。I～K地区では、各地区全体にわたり遺物の散布が認められるが、特にJ地区では全体的に破片数が多い。しかし、I地区では削平されているにもかかわらず、全遺物に占める須恵器の比率は他の地区に比べ高い。これに対してL地区では、特に包含層中の遺物破片数の多かった西端部付近でも、須恵器の分布はそれほど認められない。しかし、その一方で和泉丘陵斜面に位置するL地区東端からM₁地区にかけて、かなりの須恵器が確認されている(第111図)。須恵器を伴う遺構は、I～L地区内で8世紀末～9世紀初頭にかけての溝を検出したにすぎない。須恵器がI～K地区全体に分布することから、周辺に須恵器に関係する遺跡が存在することを十分に予想できる。また、和泉丘陵斜面に須恵器が出土しM₂地区に全く発見できなかったこと、M₁地区で鉄鏝が出土したことや立地などを考えあわせると、かつてM₁地区周辺に古墳が存在したことを物語る。

最後になったが、今回の検討で図示できなかった中国製白磁・青磁類、瓦類の分布について、地区別に簡単に紹介しておく(第3表)。I～K地区に関しては、白磁・青磁ともそれほど顕著な分布状況を示さない。しかし、L地区南西隅では、白磁が比較的まとまった

状態で出土したのに対し、青磁は散見されるにすぎない。いずれにしても白磁・青磁が包含層出土全遺物に対して占める割合は、1%にも満たない。

次に瓦類について簡単に触れると、やはり各地区ともまとまった状態では出土していない。『信貴山縁起』山崎長者の巻では校倉が瓦葺きで描かれているが、I・L地区で検出した建物跡周辺で集中して出土する傾向も示さない。周辺に瓦葺き建物が存在したかもしれないが、瓦がL地区東端からM₁地区にかけて比較的多く出土していることから、ここではM₂地区で検出した建物跡との関連を指摘しておきたい。

約1年間にわたって発掘調査を行った山直中遺跡の包含層から出土した遺物片について、その分布を中心に検討を加えた。以下、今回の検討を通じて得た成果と問題点を整理し、まとめたい。

まず山直中遺跡の場合、包含層出土遺物全体の中で瓦器碗・皿の占める割合が最も高く、いわゆる中世遺跡の存在を示すものと考えられる。また遺構との相関関係については、瓦質土器の分布に限ると、15世紀代の遺構が集中するところに遺物も集中する傾向を示していることから、両者の関係も十分に考えられる。しかし、分布密度は、地形条件・自然条件・後世の土地利用などによって左右されることが多い。ゆえに遺跡の範囲を想定するには、上記の理由から条件が恵まれない限り不可能に近いものと思われる。

一方、遺構が十分に確認されていないが、須恵器が示す分布状況は、周辺に遺構が存在することを予想させる資料となりうる。今回の山直中遺跡の調査では、M地区周辺に古墳の存在を予想させ、I～J地区周辺に集落遺跡の存在を暗示する。後者については、すぐ南に位置する奈良時代を中心とする芝ノ垣外遺跡との関連も考慮する必要がある。

なお参考資料として山直中遺跡発見の契機となった磯之上山直線内分布調査の結果を呈示する⁽⁷⁾。この調査は、予定路線を長さ100m・幅200m単位で行なわれたものである。報告によると、I地区付近と考えられるところで古墳時代(もしくは奈良・平安時代)の須恵器・土師器などが採集されている。このことは、検出した遺構や包含層出土遺物の傾向と一致したデータとして興味深く、また分布調査の重要性を再認識させるものである。

ただ、今回の平面的分布状況の検討では、瓦器碗・皿や瓦質土器などを、型式ごとに細分して登録する作業を行わなかった。なぜなら細分すると、多数の破片から特定の時期を示す破片を探すことは非常にむずかしく、その割には効果が望めないと考えたからである。

以上のことは、調査者が調査中に漠然としたイメージを描くことで、包含層中で高い比

率を示す遺物が遺構を伴うことは、当然のことと考えられがちである。しかし、それを数値として示すことは、推測を客観的な事実置き換える重要な作業である。また遺構を伴わない遺物に対しては、周辺の歴史的環境を考える上で参考資料となるにちがいない。

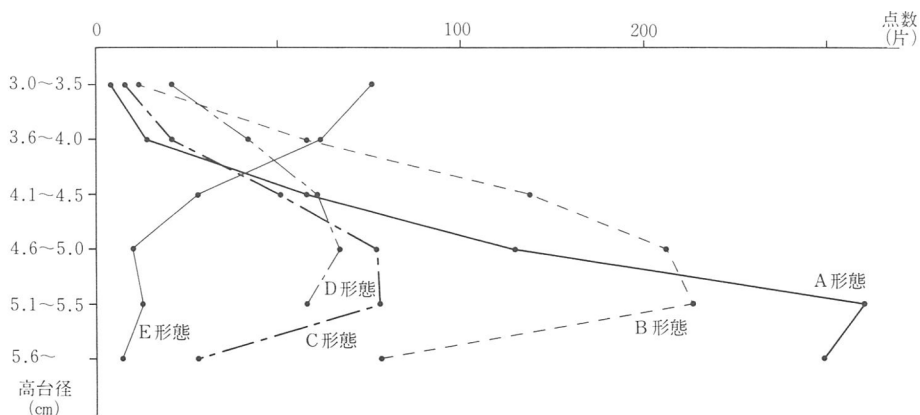
今回の作業は、先ほども述べたとおり出土遺物に即した遺物台帳を作成し、山直中遺跡に限定して行ったものである。当協会では、府道磯之上山直線建設に伴い、多くの遺跡を発掘調査実施中であり、各遺跡にそった遺物台帳・ファイルを作成中である。同様に分析・検討することによって新たな知見が得られるものと考えられる。今後の調査・研究に期待するところが多い。

B 暗文・高台形態の検討 第112図 第4表

瓦器碗は、一般的に高台径が大きく、断面形が「ハ」字形・方形のものが古いとされ、見込み部にはランダムなミガキや斜格子状暗文、平行状暗文が施されているといわれている。また、高台がほとんど機能せずその径の小さなものは新しく、見込み部には連続圏線状の暗文が施されている。これが正しいかどうかを検証するため、1925件のデータをもとに①瓦器碗の高台形と底径との関係(第112図) ②瓦器碗の高台形と暗文との関係(第4表)を調べた。

① 瓦器碗の高台形・底径との関係 第112図

まず高台形Aタイプに注目すると、底径5.1～5.5cmに最も多く、次いで5.5cmのものが多い。しかし3.0～3.5cmのものは、ただの1片にすぎない。一方、高台形Eタイプについ



第112図 高台形態と高台径との関係

てみると、底径3.0～3.5cmに集中する傾向を示す。逆に5.5cm以上のものは、7片のみである。このA・Eタイプの間に関分類したB・C・Dタイプの高台は、明確な変化は示さないが、徐々に底径が小さくなるようである。

このように、高台形態の安定したA・Bタイプほど底径が大きく、高台形の不安定なEタイプほど底径が小さいということが追認できた。しかし、両者の中間形態では、それほど明らかな変化は見られない。

② 瓦器碗の高台形と暗文との関係 第4表

見込み部に斜格子状暗文を持つものは、高台形Aに最もよく対応し、B・Dにもよく似た傾向は見られる。次に平行状暗文を持つ瓦器碗は少ないが、B・Dに比較的よく対応する。連結輪状暗文を持つものは、B形態に最もよく対応するが、他のものともよく対応する。見込み暗文がd・eタイプのものはほとんどないが、高台形態D・Eに見られる。

暗文 \ 高台	A	B	C	D	E
a	38	22	15	21	2
b	3	7	4	8	1
c	38	86	29	19	21
d	1	0	0	0	3
e	0	1	0	1	1

第4表 高台形態と暗文との関係

斜格子状暗文を持つものを層別に見ると、A形態の高台の半数が遺構出土で、63-O S・51-O S・50-O OなどのII-1期～III-1期に属するものが多い。また包含層では、3d層が多い。この傾向は、B・C・D形態にも認められる。平行状暗文では、高台形態Bで2片54-O Wから出土している以外は、すべて包含層出土である。包含層中でもB・C形態は3d層が多いが、D・Eは3d層などに多い。連結輪状暗文はその大半が包含層出土である。連続圏線になると、すべてが包含層出土である。

以上のことから、高台形態が安定するものには斜格子状暗文が、不安定なものには連続圏線が対応するという相関関係が見られる。また斜格子状暗文と平行状暗文とは、ほぼ同時期の遺構に共存し、やや後まで平行状暗文が残るようである。連結輪状暗文・連続圏線を施すものは、遺構に伴うものがない。しかし、それが存在することは当調査区周辺に建物廃絶後の何らかの生活痕を示すものと言える。

C 層別遺物出土状況の検討 第5～8表

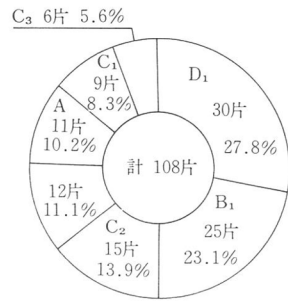
今回の調査で検出した遺物包含層は、第1～第3e層に分かれるが、そのうち第1～第3b層はいずれも16世紀以降に耕作ないしは人為的な移動を受けた形跡があるので、ここ

では第1～第3b層を、第1～第2b層と第3a・3b層の2つにまとめて扱っている。まず、層ごとの出土遺物の数量を見てみると、第1～第2b層4,065片、第3a・3b層13,663片、第3c層17,857片、第3d層12,999片、第3d層129片である。前二者に包含された遺物は、他の層出土の遺物に比べるとローリングが著しい。これらの層のうち近世の遺物を包含しているのは第1層と第2層だけであるが、他の層も総て11世紀以降の遺物を包含しており、古墳時代や8・9世紀の純粋な遺物包含層はない。したがって、須恵器の出土状況は、平面的な分布状況の検討を行うにとどめ、ここでは、前述してきた分類を基礎に、11世紀以降の主たる遺物について各層ごとの出土状況を分析し、各層出土遺物の微差の有無を検討する。遺構からの出土例の詳細は別に扱う。なお、ここで提示した数量は分類可能な部分に限った破片の数であり、接合前の状態の破片の数である。また、各器種各層ごとの層別の構成比は、その器種の中で比較的破片数の多い類に限って検討した。

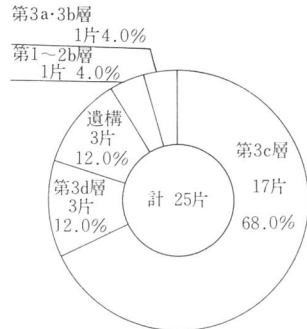
① 瓦器椀

瓦器類は、計44,302片出土したが、そのうち高台部分の破片数1,925片をA～E形態に分類し、層位別出土状況を検討する。

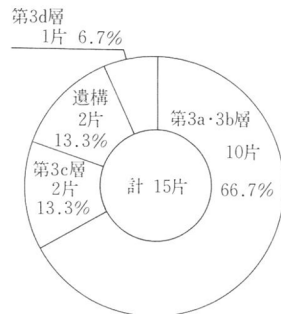
まず、3b層では、A・B形態が55.0%を占めるが、E形態も14.0%を占める。この傾向は3c層でも認められ、E形態は17.0%を占める。これに対し、3d層では、A・B形態が64.0%を占めるものの、E形態は8.0%にすぎない。瓦器椀の層位別出土状況を見るかぎりでは、3d層と3c・3d層との間に差異が認められる。



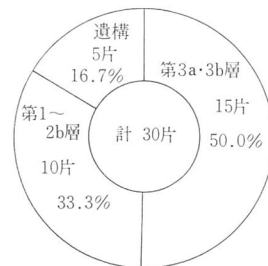
1. 各類構成比



2. B₁類出土層位



3. C₂類出土層位



4. D₁類出土層位

第5表 須恵質鉢類別構成比・出土層位

② 須恵質鉢 第5表

計323片出土しているが、そのうち分類可能な部分が107片ある。その類別の比率は第5表-1の如くで、D₁・B₁類の二種類で半数以上を占める。

次に各類のうち、破片数が上位3位までのものについて、層別の出土状況を第5表-2~4に示した。3種とも第3e層からの出土はなく、遺構からの出土数は少ない点は共通しているが、資料数の多いD₁類が第3c・3d層から1片も出土していない点はおおいに注目される。また、D₁類を出土する遺構には瓦器の細片が少数出土する場合があるが、D₁類が確実に瓦器と共伴すると判断される例はない。つまり、須恵質鉢D₁類は後出するタイプである公算が強いといえる。

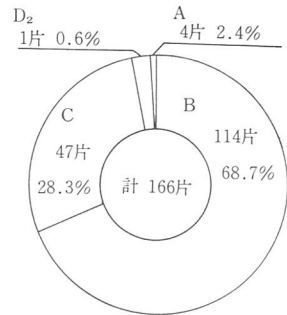
C類について少し付け加えると、C₁類と第3e層以外のすべての層から出土しているのに対し、C₂類は第3c・3d層から出土していない。また、第3c・3d層からの少数のC₂類の出土は、後の検討結果からすると混入ないし取り上げミスの疑いがもたれる。

③ 瓦質鉢(摺鉢)

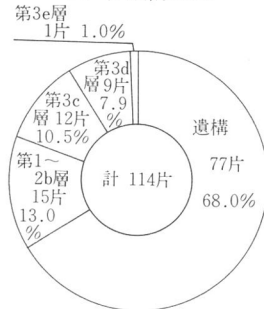
資料数が少なく、計49片出土しているにすぎない。そのうち分類可能なものは、B₁類13片、C₂類15片、D₁類2片、D₂類3片をそれぞれ数える。これらに共通するのは、第3d・3e層からの出土は1片もないことである。第3d層から出土した瓦質の鉢は第23図(187・188)のような供膳形態の鉢だけである。遺構からはB₁・C₂類が出土しているが、これには瓦器は伴っていない。つまり、瓦質摺鉢そのものが、後出する器種の公算が強いものといえる。

④ 土師質羽釜 第6表

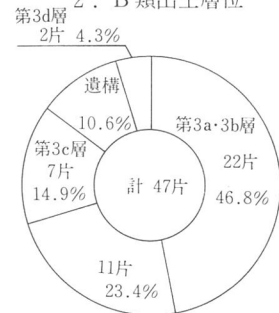
計627片出土しているが、分類可能なものは166片を数える。その内訳は第6表-1に示



1. 各類構成比



2. B類出土層位



3. C類出土層位

第6表 土師質羽釜類別構成比・出土層位

した如く B・C類がほとんどである。B類及びC類の層別の出土状況は第6表-2・3に示した。C類には別段目立った兆候はないが、B類のほとんどが遺構から出土していることがわかる。そして、詳しくは後に検討するが、B類は尾上編年II-3~III-2に平行する瓦器碗を伴っている。A類についても同様のことがいえる。

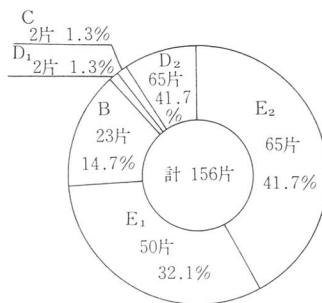
⑤ 瓦質羽釜 第7表

計450片出土しているが、分類可能なものは156片を数える。その内訳は第7表-1に示した如く、E₁・E₂類が主体と言える。次に、上位3タイプの層別の出土状況を第7表-2~3に示した。B類のほとんどが遺構から出土したものであることがわかる。そして、実際にはB類を出土する遺構は限られており、それには尾上編年III-1に平行する瓦器碗を伴う。E₁・E₂類については、両者とも第3d層から出土しない点が注目できる。

⑥ 輸入陶磁器 第8表

遺構出土分を含めて総数152片が出土している。その内訳は白磁(青白磁を含む)が88片、青磁59片、褐釉5片で、白磁が多数を占める(第8-1)。これらの青磁・白磁のなかで確認できる類別の構成比は第8表-4・5のとおりで、青磁では龍泉窯系碗I類が圧倒的多数を占めるが、白磁にはそれほど際立った比率を占める類はない。

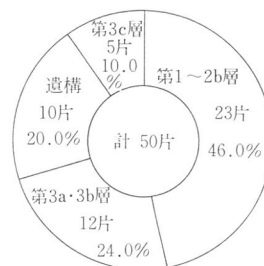
青磁・白磁の遺構出土及び層別の出土数量は第8表-2・3の如くである。青磁・白磁とも第3e層からの出土はなく、第3c層からの出土数が多いという点は一致しているが、第3d層の出土数及びその全体に占める割合には、顕著な相違が見られる。第3d層から出土した青磁は全体の6.8%を占めるにすぎないが、白磁は20.5



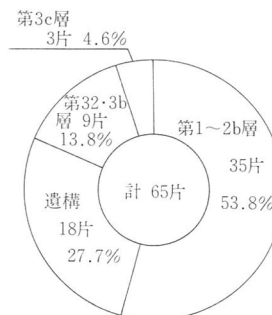
1. 各類型構成比



2. B類出土層位



3. E₁類出土層位



4. E₂類出土層位
第7表 瓦質羽釜類別構成比・出土層位

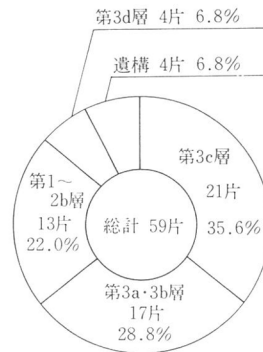
%と多数を占める。また、遺構から出土した両者の比率も大きく異なっており、白磁は30.7%を占めるが、青磁はわずか6.8%が遺構から出土したにすぎない。つまり、下層の遺物包含層である第3d層からは青磁はほとんど出土しないし、青磁を出土する遺構も少ないといえる。

次に、こうした出土状況の差異を類別にみでみる。第3d層からは白磁碗Ⅱ・Ⅳ類と龍泉窯系青磁碗Ⅰ-5・b類が出土している。遺構から出土した白磁は碗Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ類・皿Ⅸ類があるが、このうち皿Ⅸ類は近世遺構からの出土である。遺構から出土した分類可能な青磁は龍泉窯系碗Ⅰ類だけであるが、この遺構には15世紀前後の時期の遺物が伴っている。白磁皿Ⅸ類・龍泉窯系碗Ⅲ類は第3d層及び中世の遺構から出土していないが、いずれも資料数が少なく積極的に評価すべきかどうか躊躇される⁽⁸⁾。

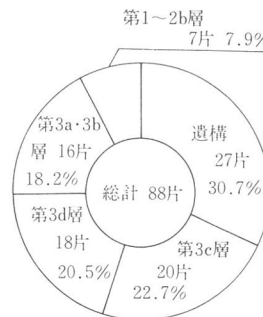
以上、細分された各器種ごとの構成比率や層位ごとの出土数についてみてきた。第3c～3e層からは出土しないものとして、須恵質鉢C₂・D₁類と瓦質摺鉢の各類があり、第3d・3e層から出土しないものとして、瓦質羽釜E₁・E₂類があげられる。複数の器種に、特定の遺物包含層からは出土しない類があることが明らかになったといえる。どうやら、器種を細分したことや遺物包含層の分層が無意味ではなかったようである。



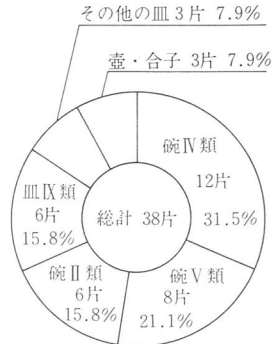
1. 輸入陶磁器の組成



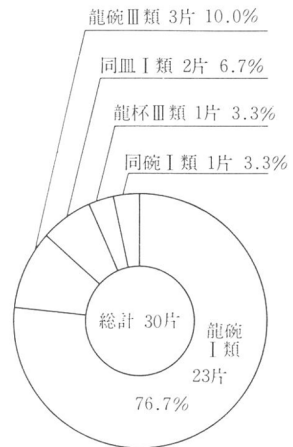
2. 青磁の層別出土状況



3. 白磁の層別出土状況



4. 白磁の類別比



5. 青磁の類別比

第8表 輸入陶磁器の組成と層別出土状況

そこで、次に分類された各器種どうしの共伴関係を、いくつかの出土例について調べ、その有機的関係を検証し、年代観を与える試みをおこなう。

D 遺物共伴関係の検討 第9～12表

堺市以南のいくつかの遺跡の、遺構から出土した遺物の共伴関係を第9～12表に示した。器種の分類は本報告書で行ったものと同じであるが、瓦器碗については器種の分類を示さずに尾上編年⁽⁷⁾との併行関係を示した。瓦器碗が出土しているかどうかの記載が明瞭でなく、かつ図示のないものについては瓦器碗が共伴していないものと判断した。原資料にあたる余裕を得ず、報告書の掲載図により判断したことが多いので、事実と反する点があれば責任は挙げて筆者にある。また、本報告書でおこなった分類が、該当器種のすべてを網羅するものではないことはいうまでもない。例えば須恵質鉢A・D₁類のように、より細分されてしかるべきものもあり、それについては今後の資料増加が望まれる。

① 須恵質鉢

- A 類—3例あり、II—3ないしIII—1の瓦器碗と共伴する。ただし、山直中遺跡例は出土状況から判断すると、古い時期の須恵質鉢が混入したケースの公算が強い。他の出土例についても、従来⁽¹⁰⁾の年代観とはあまり一致しない。
- B₁類—2例あり、II—3・III—1の瓦器碗と共伴すると考えられる。
- B₂類—箕土路遺跡例だけである。同資料はIII—1～IV—1までの瓦器碗を伴っており、はっきりした共伴関係は不明である。
- C₁類—4例あり、III—3～IV—2の瓦器碗と共伴すると判断される。
- C₂・C₃類—C₂類が2例・C₃類が1例ある。箕土路遺跡例はIII—2～IV—3ないし4の瓦器碗を伴っているが、他は瓦器碗を伴わず瓦質羽釜E₁・E₂類などと共伴する。上限がIV—3ないし4の瓦器碗の時期で、瓦器碗消滅後も存在する可能性が強い。
- D₁類—3例あり、そのうち1例はIII—3～IV—5の瓦器碗と共伴しているが、他の例から判断するとIV—2以降の瓦器と共伴すると思われる。

② 瓦質鉢（摺鉢）

10例あり、うち瓦器碗と共伴するのは箕土路遺跡例だけで、他は瓦器碗を伴わず、瓦質

羽釜 E₁・E₂類を伴う例が多い。上限がⅣ-3ないし4の瓦器碗の時期で、主には瓦器碗消滅後のものと判断される。細分した類の差異は不明である。

③ 土師質羽釜

A類-1例だけあるが、A類そのものが大和型とされているタイプで、搬入品かどうかは不明であるが、和泉では普遍的な存在ではない。本例に限ればⅢ-1の瓦器碗と共伴するが、編年的観点よりも通交関係の面で資料的価値が高いと思われる。

B類-和泉型と称されるだけあって、21例を数える。Ⅱ-3～Ⅲ-3までの瓦器碗と共伴すると判断される。B類垂式は5例あるが、はっきりと判断しがたい。

C類-16例ある。そのうち土師質羽釜B類と共伴する例が3例、紀伊型甕と共伴する例が1例ある。菱木下遺跡S E-14例のように、例外的にⅢ-1～3の瓦器碗と共伴するものがあるが、Ⅳ-1～3の瓦器碗と共伴するのが通例である。B類に後出する類と判断して大過ないであろう。

E₁・E₂類-箕土路遺跡で2例ある。そのうち1例はⅢ-1～Ⅳ-1の瓦器碗と共伴するが、この遺構からは他にも紀伊型甕など新しい要素を持つ遺物が出土して、Ⅳ-1の瓦器碗の時期を上限と判断するには躊躇される。

④ 瓦質羽釜

B類-山直中遺跡例だけである。この資料は一括性の高いもので、Ⅲ-1の瓦器碗と共伴することは確実である。今のところ和泉の瓦質羽釜の最も古い例といえるが、堺市近郊の未報告資料には同じ時期の例が少数あるようである。

C類-2例しかないが、共伴する瓦器碗がⅣ-3ないし4で、同形態の土師質羽釜の瓦器碗との共伴関係と矛盾しない。

D類-山直中遺跡例だけである。Ⅲ-1の瓦器碗と共伴することはまちがいないが、以降の形態変化がまったく不明である。

E₁・E₂類-E₁類は9例、E₂類は16例ある。両者が共伴する例が7例あり、E₁類だけの出土例はなく、両者は時期的に共伴するものと判断される。山直中遺跡例でⅣ-3ないし4の瓦器碗と共伴する例があるが、瓦器碗と共伴しない例が11例ある。瓦器碗消滅後盛行する類と判断される。また紀伊型甕との共伴関係も認められる。

紀伊型甕—5例あり、和泉地方にかなり分布していることがわかる。5例のうち4例がⅢ—1～Ⅳ—4の瓦器碗と共伴しているが、紀伊での出土例から判断しても⁽¹¹⁾Ⅳ—2の瓦器碗の時期が上限で、瓦器碗消滅後も存在する器種と考えられる。

⑤ 輸入陶磁器

白磁碗—碗Ⅱ類が3例、Ⅳ類が7例、Ⅴ類が2例あり、Ⅱ類のうちⅣ類・Ⅴ類と共伴する例がそれぞれ1例ずつある。これらの白磁碗はⅡ—1～Ⅳ—5までの瓦器碗と共伴するが、瓦器碗Ⅱ—2・Ⅲ—1の時期が中心になるようである。

白磁皿—和気遺跡第35工区堀3から皿Ⅲ類がⅡ—3ないしⅢ—1の瓦器碗と共伴している。

青磁—箕土路遺跡で3例ある。822—OW出土例は上田分類青磁碗Ⅱ類⁽¹²⁾に分類され、これには瓦器碗は伴わないが、他2例は他の遺物との共伴関係は明瞭ではない。

以上、和泉地方のいくつかの出土例から、細分された各器種の共伴関係を考えてきた。必ずしも一括性に富む資料ばかりとはいえず、検討結果に不十分な点は残しているが、本報告でおこなった各器種の分類が少なからず編年の意味を持つことが明らかになったといえよう。その判断結果をまとめたのが第13表である。次にこの表に基づいて各器種の年代観や消長・変化についてふれ、まとめとする。

E まとめ 第13表

第13表は尾上編年に依拠して構成されている。尾上編年には実年代の一端を示す資料が若干あり、それを基にタイムスケールが示されている。また本章第2節でふれたように修正案も提示されている。本項ではこの第2節で示した年代観に則して記述を進めるが、須恵質鉢のように第13表で得られた年代観と従来の研究成果が一致しない場合⁽¹³⁾も生じている。

和泉地方における中世前期の土器の消長・形態変化を第13表から読み取るとすれば、瓦器碗以外の顕著な存在として、土師質の羽釜・甕と瓦質の摺鉢・羽釜をあげることができる。遅くとも12世紀の末には煮炊の用具として羽釜が登場し、当初はもっぱら土師質の製品がそれに供されている。瓦器羽釜はあるにはあるが極めて少数で、継続的な生産が行なわれた兆候はない。瓦質羽釜の本格的な生産開始は14世紀をまたねばならないが、以降は瓦質の羽釜が土師質の製品にとって変わるようである。瓦質の摺鉢や甕の出現と普及についてもほぼ同様のことが言えるようである。つまり、瓦質製品そのものが普遍的な存在と